

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第221集

大門遺跡

平成18～21年度(都)田端掛之上線緊急地方道路整備事業(街路B)に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2010

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第221集

大門遺跡

平成18～21年度(都)田端掛之上線緊急地方道路整備事業(街路B)に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2010

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

序

今回、地方道路整備事業に伴って発掘調査を実施した大門遺跡は、袋井市高尾に所在します。

遺跡に近接する大門大塚古墳は、静岡県西部地方を代表する後期古墳であり静岡県の史跡として指定されています。この古墳は、明治16（1883）年に村民によって発掘され、鏡、金銅装の馬具、刀劍類、須恵器などが発見されています。遠江ではいち早く横穴式石室を取り入れ新しい文物を副葬していることから、古墳の被葬者はこの地域に君臨した新興勢力の首長と考えたい人物です。

ところで大門遺跡は、昭和37（1962）年に東海道新幹線工事に伴って発掘調査され、その後、数次にわたって調査されていました。この結果、弥生時代中～後期の住居跡などが発見され、二千年前にもこの地に人々の生活の営みがあったことがわかりました。

今回の調査は、平成18（2006）年から平成21（2009）年まで実施され、弥生時代の堅穴住居跡・溝状造構・土坑などが検出されました。その意味では、この地域の歴史を語る材料を付け加えることができ意義深く思われます。

なお調査成果の詳細は本書に譲りますが、事業は市街地の交通改善のために緊急に実施すべく計画されたものであります。また遺跡は住宅の密集する町中にあり、発掘調査についても、用地取得の進んだ部分から年次をまたいで実施しました。そのため関係者の多大な理解と援助を有形無形にいただき、無事終了することができました。

最後になりますが、調査と報告書作成にあたっては、静岡県袋井土木事務所、文化課、地元袋井市、高尾の住民の皆さんには多大なる御配慮を頂きました。ここに厚く御礼申し上げます。調査は小規模でありながら複数年度にわたって実施されました。寒中と猛暑の中、現地作業に従事した方々の労をねぎらい、あわせて資料整理に従事した方々にも、その労をねぎらい深く感謝いたします。

平成22年3月

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

所長 天野忍

例　　言

- 1 本書は、静岡県袋井市に所在する大門遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は（都）田端掛之上線緊急地方道路整備事業（衝路B）に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として、静岡県袋井土木事務所の委託を受け、静岡県教育委員会文化課の指導のもとに、財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。
- 3 現地調査は平成18年5月～平成21年9月に3年次にわけ実施し、資料整理を平成21年4月～平成22年3月に行った。
- 4 調査の体制は次のとおりである。

	平成18年度	平成19年度	平成20年度	平成21年度
所長	斎藤 忠	斎藤 忠	清水 哲	天野 恵
常務理事兼総務部長	平松 公夫			
常務理事兼事務局長		清水 哲		
調査部長	石川 順久			
次長兼総務課長	鈴木 大二郎	大場 正夫	大場 正夫	松村 享
次長兼調査課長	及川 司	及川 司	及川 司	及川 司
専業担当	望月 高史	望月 高史	青井 拓司	青井 拓司
調査担当	佐々木 和也	足立 順司	足立 順司	足立 順司

- 5 本書の執筆は足立順司が担当した。
- 6 遺物写真撮影は、当研究所職員が行った。
- 7 出土した石器については、静岡大学名誉教授伊藤通玄先生の石材同定による。
- 8 本書の編集は、財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が行った。
- 9 発掘調査の出土品及び記録資料については、静岡県教育委員会文化課が保管している。

凡　　例

本書の記述については、以下の基準に従い、統一をはかった。

- 1 本書で使用した方位はすべて世界満地系による公共座標系の方位である。
- 2 遺構の標記は以下のとおりである。
SD = 清 SK = 土坑 SX = 不明遺構（土器集中箇所や性格不明遺構も含む） SP = 小穴
- 3 写真図版中の遺物の番号は本文・挿図の番号と同一である。
- 4 参考文献
出土遺物観察表については第5章の文末に記す。

目 次

序・例言・凡例・目次

第1章 調査に至る経過	1
第2章 遺跡の位置と環境	1
第1節 地理的・人文的環境	1
第2節 歴史的環境	2
第3章 調査の方法と経過	4
第1節 調査の方法	4
第2節 作業の経過	4
第4章 調査の成果	7
第1節 遺構	7
第2節 出土遺物	25
第5章まとめ	36
第1節 遺構と遺物の検討	36
第2節 研究史の中で	37

挿図目次

第1図 周辺遺跡分布図	3	第14図 5区全体図	21
第2図 調査区全体図(1)	5	第15図 5区遺構平・断面図	22
第3図 調査区全体図(2)	6	第16図 6区全体図	23
第4図 1区全体図	8	第17図 6区遺構平・断面図	24
第5図 1区遺構平・断面図	10	第18図 出土遺物実測図(1)	27
第6図 2区全体図	11	第19図 出土遺物実測図(2)	28
第7図 2区遺構平・断面図	11	第20図 出土遺物実測図(3)	29
第8図 3区全体図	13	第21図 出土遺物実測図(4)	30
第9図 3区遺構平・断面図(1)	14	第22図 出土遺物実測図(5)	31
第10図 3区遺構平・断面図(2)	15	第23図 出土遺物実測図(6)	33
第11図 3区遺構平・断面図(3)	16	第24図 出土遺物実測図(7)	34
第12図 4区全体図	18	第25図 出土遺物実測図(8)	35
第13図 4区遺構平・断面図	19		

挿表目次

表1 周辺遺跡一覧	3	表3 出土遺物観察表	40
表2 4・6区遺構一覧表	39		

図版目次

図版1	1 調査区全体写真（空中写真の合成）	図版9	1 4区ピット群（東より） 2 SK404（南より） 3 SK404（西より） 4 SP434（南より）
図版2	1 大門遺跡全景（北より） 2 1区北半全景（上より） 3 1区南半全景（上より）		
図版3	1 SB1083（西より） 2 SX1114（北より） 3 SX1117（東より）	図版10	1 5区全景（上より） 2 SD501・502（西より） 3 SX501（南より） 4 SX501土器出土状況（西より）
図版4	1 2区全景（南より） 2 SX201（北より） 3 SP201（南より）	図版11	1 SX501・SD501（西より） 2 SK501（南より）
図版5	1 3区全景（北より） 2 SH301（東より）	図版12	1 6区全景（北より） 2 6区完掘（北より）
図版6	1 SX301（北より） 2 SD301拡張1（北より） 3 SD301拡張3（北より）	図版13	1 6区南東（北より） 2 SP641（東より） 3 6区撲上（西より） 4 SP602（西より）
図版7	1 4区全景（北より） 2 4区完掘全景（西より）	図版14	出土遺物1 土器
図版8	1 4区遺構検出前（南より） 2 4区完掘全景（南より） 3 SD404（北より） 4 SD404（南より）	図版15	出土遺物2 土器
		図版16	出土遺物3 土器
		図版17	出土遺物4 石器ほか

第1章 調査に至る経過

静岡県袋井市事務所では袋井市大門地内に田端掛之上線緊急地方道路整備事業の一環として道路拡幅を計画していた。そのため計画範囲について埋蔵文化財の照会があり、事前に静岡県教育委員会文化課では、計画された範囲に遺跡の範囲が及ぶかの確認調査を実施し、事業対象地が周知の大門遺跡の範囲であること、從前において弥生時代から中世の遺物が発見されていたことを回答した。

当初、調査範囲の大門には6世紀前半の大門大塚古墳が存在し、その周辺から弥生土器が発見されていたので、大門Ⅰ遺跡と呼称していた。

さらに袋井市立中央公民館（旧袋井市役所）については、東海道新幹線建設に伴う事前発掘調査以後、弥生時代の集落跡が存在することが判明し、その周辺を大門Ⅱ遺跡と呼称し、分けていたが、今日ではそれぞれ別の集落遺跡ではなく、一連の遺跡であると考えられ、大門遺跡と称している。

計画範囲のうち大門遺跡に該当する範囲は事前調査の対象とされ、平成18年5月1日に静岡県袋井市事務所は、調査実施権限として静岡県埋蔵文化財調査研究所とのあいだに、埋蔵文化財調査に関する委託契約を結び発掘調査を実施した。なお調査に関する調整と指導は静岡県教育委員会文化課である。

翌年の平成19年9月11日には、平成18年度に続く部分を調査対象とする埋蔵文化財発掘調査と資料基礎整理に関する委託契約を結び、発掘調査および資料整理を実施した。

平成21年1月20日には、平成19年度に続く部分を調査対象とする埋蔵文化財調査に関する平成20年度委託契約を結び、発掘調査および資料整理を実施し、総て11月20日には平成21年度委託契約を結び、資料整理を実施し、調査報告書を刊行し、すべての業務を完了した。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的・人文的環境

大門遺跡の存在する袋井市高尾は、JR東海道本線袋井駅の東南にあたり、小笠山丘陵先端部に位置する。袋井市は平成の大合併によって浅羽町と合併した。このことによって遺跡の所在する高尾は、新たに広がった袋井市域において位置の上でも中央地域にあたるようになった。

遺跡周辺の地形は、東西に走れる原野谷川に面した沖積平野と段丘・丘陵、そして小笠山丘陵を流れ下る小笠沢川や法多沢川によって形成された谷底平野に分かれる。原野谷川は掛川市大尾山麓から発するが、袋井市睦町付近で、大きく屈曲し、南下する。流域の旧浅羽町町域から大きく広がる沖積平野には、茶園と水田などの耕作地が広がり、小笠山先端部の段丘と谷底平野には、茶園や漑地と集落が点在する。

もともと高尾という地名は、江戸時代の高部村と赤尾村の両村が合併し、高尾となった字（あざな）である。高尾周辺は江戸時代には農村であったが、JR東海道本線袋井駅の設置に伴って、旧東海道袋井宿に変わって、町屋が立ち並ぶ商業地へと化した区域である。大正初期には秋葉・中遠馬車街道が開通し、高尾は交通、商業の要衝となつた。駅前は飲食店・宿屋・販売・運輸の商店や会社が相次いで創業され、活気に満ちていた。

近代化の波がこの地域にも訪れると、「我が町にも中等学校を」の機運のもと、大正12（1923）年には県立袋井商業高校の前身、袋井町・笠西村組合立袋井商業学校が創立された。学校用地という広い敷地を確保するため選ばれたのは、現在の中央公民館の建っている大門遺跡の一部であり、商業地や住宅地からやや離れた畠の一角であった。このことを契機として、駅前から能れた大門遺跡周辺は住宅・商店なども建てられ、今日の様相を呈するようになった。大門遺跡の発掘調査では表土から基盤層まで建物建築に伴う搅乱が及んでいるが、それは近・現代における発展の痕跡とみることができよう。

第2節 歴史的環境

ここでは周辺に分布する遺跡にあわながら、大門遺跡の歴史的環境を概観してみたい。

発掘調査の行われた長者平遺跡と大畠遺跡は、縄文時代という大門遺跡周辺ではもっとも古い段階の歴史を刻む遺跡である。袋井市宝野にある長者平遺跡では、発掘調査によって縄文時代中期の集落が検出されている。集落は円形のプランをもつ竪穴住居跡8軒からなり、遺跡の西側から埋葬穴と考えられる土坑が発見されている。この集落遺跡は谷底平野を見下ろすやや小高い段丘に営まれている（袋井市 1983）。

袋井市岡崎にある大畠遺跡は、発掘調査によって縄文時代中期から晩期の集落が検出されている。この集落は竪穴住居跡と平地式住居跡からなり、平地式住居跡は後期前葉と晩期和等であり、竪穴住居跡は中期前葉と末葉、後期に属すると考えられた（袋井市 1983）。

遺跡から人骨9体の遺存する埋葬穴や、人骨の遺存しないものの埋葬穴と考えられる土坑が発見されている。この集落遺跡には地点貝塚が存在し、後期には、段下のラグーンのヤマトシジミを採取したり、漁労活動が行われていたことが判明する。

弥生時代に入ると大門遺跡の周辺には、弥生時代後期から古墳時代前期の集落遺跡と墓地遺跡がある。大門遺跡の南に位置する段丘上（旧袋井市と旧浅羽町の境界）には、墓地と集落遺跡からなる团子塚遺跡と総称される遺跡群がある。これらはそれぞれ細かい地形の違いや、遺跡の時期によって、BからG地点と呼ばれている。团子塚遺跡における遺構のあり方を、時期別にみるとつぎのような特徴がみられる。

弥生中期から後葉（嶺田～白岩式土器の時期）には方形周溝墓や土器棺墓、土坑墓が多く、住居跡はG地点の独立例があるのみである。すると弥生中期においては、团子塚遺跡のある段丘は発見された方形周溝墓や土器棺墓、土坑墓の数からすれば、複数の集落による墓域であったと考えられよう。

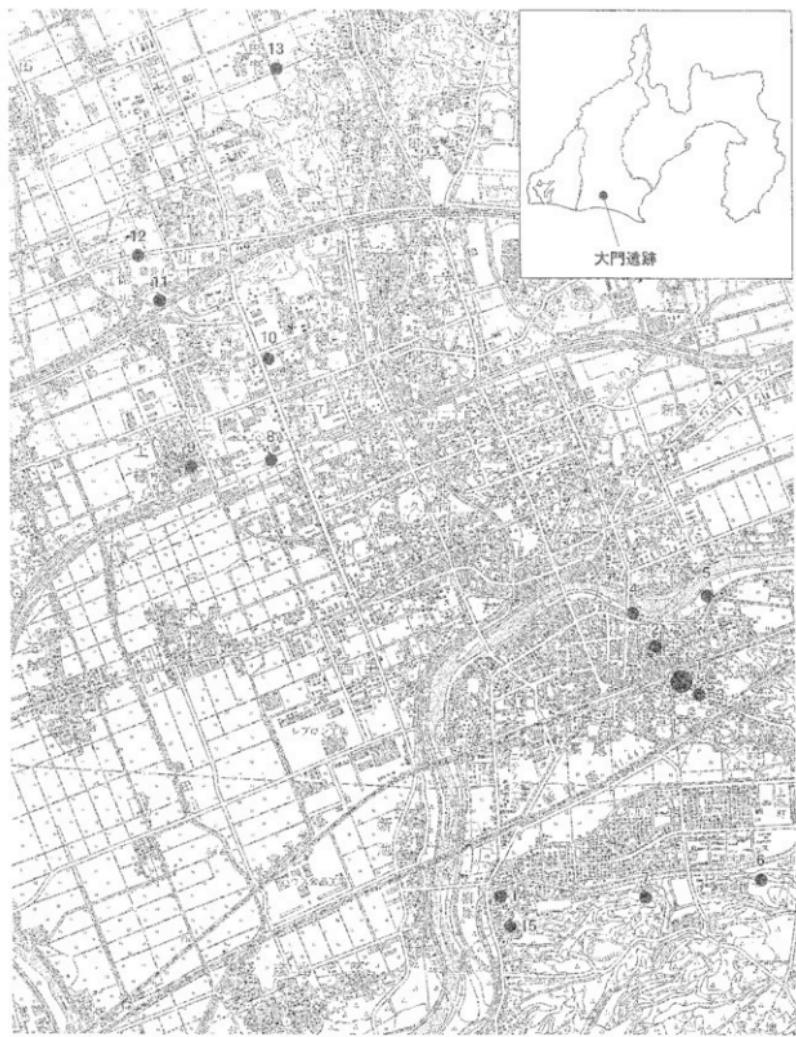
弥生後期（菊川式土器の時期）には方形周溝墓や土器棺墓、土坑墓が認められるが、中期と異なり、D・F地点の竪穴住居跡・獨立柱建物跡からなる無落遺跡の例が認められる。すると弥生後期においては、沖積平野の中につくられた集落とともに、团子塚遺跡のある段丘にも複数の集落が形成されたと考えられよう（浅羽町 1997）。

大門遺跡の西北部には、原野谷川と太田川に沿って、海岸部から続く神穂平野が広がっている。そのうち下山柴から堀越、今井にかけては、太田川の旧河道に沿って自然堤防が長く延びているが、この自然堤防上には弥生中期中葉からはじまる集落跡が多く存在する。これらの遺跡については、鶴松遺跡のように狭い調査面積の中でも、多数の重複する竪穴住居跡が認められた。第二次世界大戦の最中に行われた磐田用水掘削工事中、山梨地区下山梨や北地区鶴松の地中から、多量の土器が発見されたことが知られている。

戰後になって同じ地域で、土地改良や区画整備事業が行われ、鶴松の地中（現在の鶴松遺跡の北方）より多量の土器が発見された。この折大谷純一（筑院）氏は出土した土器を実見し、これが弥生中期の土器棺墓であることを確認し、発見された場所が大規模な弥生時代の遺跡である（大谷純一 1965）と考えた。

昭和40年代初頭には、筆者は下山梨地内敷力所で、土地改良事業中、弥生土器、土師器、須恵器、山茶碗を実見し、この地域に大規模な弥生時代の遺跡や古墳時代後期から奈良時代の集落があると考えた。この工事によって、当時残されていた冬型土地区画が地表から消えていった。

現在、鶴田I遺跡と呼称される地点では、排水路を掘削した断面に溝状遺構や竪穴住居跡と推定される落ち込みが確認され、磨製石斧（太形船刃石斧、抉入石斧）が採集されている。近年の発掘調査の結果、弥生時代中期中葉から後期中葉の遺構が認められた（白沢 崇 2007 2008）。



第1図 周辺遺跡分布図（国土地理院発行1：25,000地形図「山梨」「牧井」を複写して加筆）

表1 周辺遺跡一覧

1 大門遺跡	2 塚之上遺跡	3 大門大塚古墳	4 亀塚遺跡	5 植之上II遺跡
6 高尾向山遺跡	7 長子塚遺跡群	8 墓越遺跡	9 土橋遺跡	10 瑠璃ジョウヤマ遺跡
11 輝光遺跡	12 鶴松遺跡	13 鶴田I遺跡	14 谷坂遺跡	15 北山遺跡

東名高速道路建設に伴う発掘調査が行われた徳光遺跡（大谷純仁 平野吾郎 1968）からは、最近になって高野横（コウヤマキ）製の木棺蓋が発見され、平野部における墓地遺跡をうかがわせしめた。

以上のように大門遺跡周辺では、弥生時代の集落は鶴松遺跡のような平野のむらと团子塚遺跡のような段丘のむらという集落の立地の選択に大きな違いがあったこととなるが、今のところなぜこのような違いが生じたのかは明瞭ではない。

第3章 調査の方法と経過

第1節 調査の方法

大門遺跡の発掘調査は、道路施工工事により掘削される範囲を工事計画図面と現地の立ち会いに基づいて確定し、あわせて確認調査によって遺跡の範囲とされた部分を対象とし、実施した。

調査にあたっては、事前に猿井土木事務所の成果に基づいて、調査対象範囲を覆う範囲で基準点測量を作成した。発掘調査は数年にわたるため、大門遺跡の調査区全体図は公共座標（世界測地系 平面直角座標系）の $(X, Y) = (-1379720.000, -51,910.000)$ 上とし、一貫性をもたせている。調査対象範囲には、全体図の座標系に基づいて $10 \times 10\text{m}$ のグリッドを設置して位置を想定したが、今回の調査では調査区が狭く、1区から6区までとしたため、グリッドは使用しなかった。

地形図、実測図の作成及び遺構や土層断面の記録、遺物の取り上げにあたっては、空中写真測量と手実測による作図を行った。また、 4×5 個大型カメラとプロニー判中型カメラ、35mm小型カメラを用いて、モノクロネガ、カラーリバーサル、カラーネガによる写真撮影を行った。

第2節 作業の経過

平成18年度

現地調査の準備は5月1日の契約締結後から着手した。調査区隣地をJR東海道本線が通過しているため、その走行に支障がないようにJR東海と連絡と調整を行うとともに、住宅地に囲まれた調査区であるため、安全フェンスには防塵ネットを張った。18年度の調査区を1区とし調査をすすめた。排土置き場を確保するため1区を二分割し、それぞれ北半分、南半分とし排土置き場を確保しながら、交互に調査を進めた。なお置ききれない排土の一部は場外に搬出した。

1区の一部に遺物包含層が残っていた。溝状遺構や孤立柱建物跡などが検出され、調査終了後には埋め戻しを行って、平成18年度の調査は7月31日に終了した。

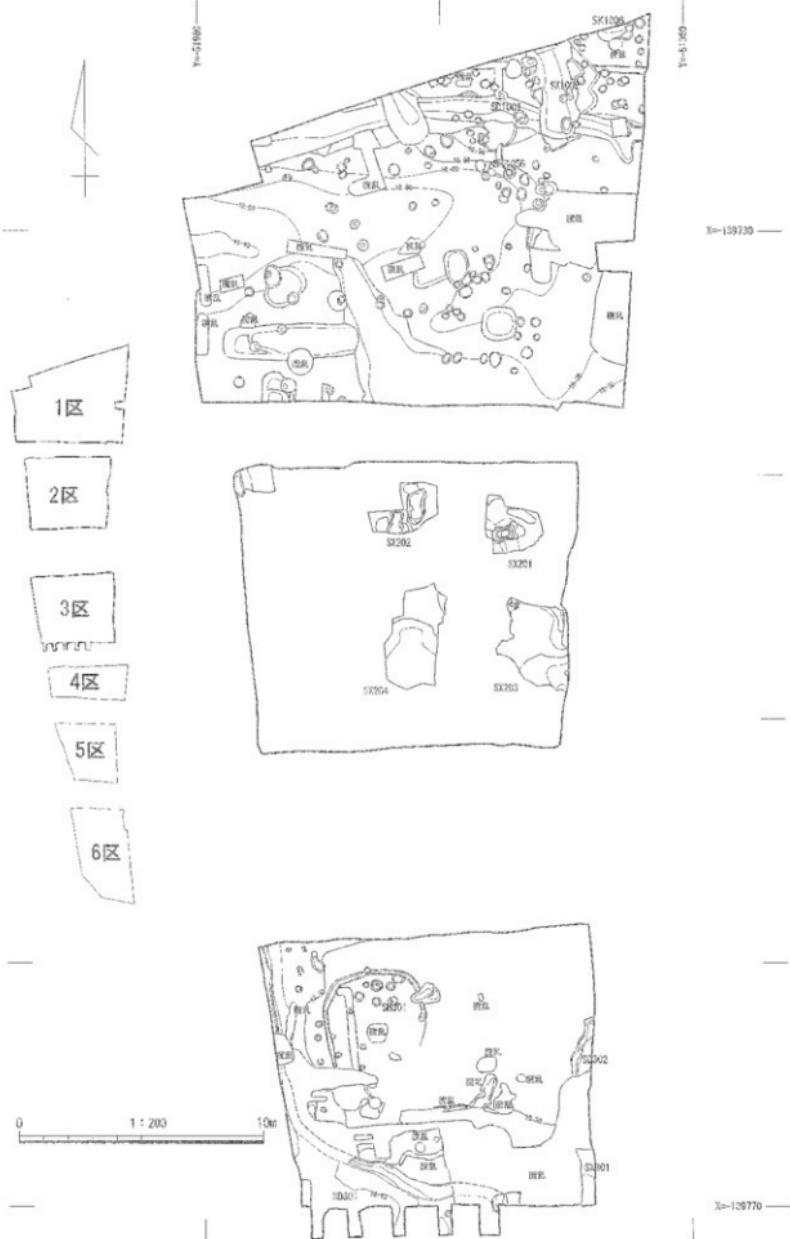
平成19年度

現地調査の準備は9月14日の契約締結後から着手した。調査対象区は2・3・5区である。関係の資機材搬入、現地事務所等の設営を10月1日から行い、既て人力掘削を10月9日から開始した。大半が建物基礎のため大きく搅乱を受けていたため、結果として、予想された調査工程を減らすこととなった。検出した遺構について、随時実測・写真撮影を行った。空中測量・写真撮影を行い、10月17日には埋め戻して調査は終了した。

3区の表土除去掘削は2区の埋め戻しから開始し、練いて造構検出を行った。発見された遺構は、堅穴住居跡、柱穴、性格不明造構、土器が多く投棄された溝が発見された。

5区については、現地事務所を調査の終了した3区に移設した後、表土除去掘削に入った。表土除去掘削後、人力掘削を12月6日から始めた。5区で発見された遺構は、柱穴、性格不明造構、溝である。

現地調査終了後、調査記録や出土遺物については、朝鮮岡県埋蔵文化財調査研究所島田整理事務所に搬送した。その後、島田事務所にて、18年度と19年度分の図面や写真などの記録類の整理、土器等の洗



第2図 調査区全体図(1)



第3図 調査区全体図[2]

净资产への注記、接合などの整理作業を実施した。

平成19年度の調査の前段、大門遺跡では、1軒の竪穴住居跡、柱穴、溝状遺構、性格不明遺構を検出した。

平成20年度

現地調査は調査対象区の建物及び駐車場撤去が遅れたため、撤去後の平成21年8月4日から着手するようにした。調査対象区は4・6区である。隣接区域の調査を実施する袋井市教育委員会によって表土除去作業が行われていたため、予定通り、4区の調査は8月4日から開始した。4区で発見された遺構は、柱穴、性格不明遺構のピットや土坑、土器が投棄された溝である。

6区は人力による遺構検出作業を8月下旬より開始した。遺構検出作業により、6区で発見された遺構は性格不明遺構のピットや土坑である。調査区終了後の引き渡しに伴う仮囲いなどの撤去や、調査関係の資・機材撤出、現地事務所撤去等を行い、9月末に平成18年度から続いた現地調査を終えた。

第4章 調査の成果

第1節 遺構

平成18から21年度の発掘調査の結果、大門遺跡では1区から6区を調査した。あらかじめ遺跡に共通する土層を述べ、つぎに各調査区別にその概観と各遺構について記述をすすめる。

調査区は調査以前に繰り返し住宅地や商業地として利用されていたため、土層については1区のみが、北側に中世の遺物を含む包含層が残っていた。それ以外の調査区には包含層は認められず、表土直下から搅乱土が、黄褐色を呈する基盤層の小等山礫層まで続く。なお遺構の覆土は黒褐色土である。

1区では中世後期・奈良時代前期・弥生時代後期の溝状遺構・掘立柱建物跡・土坑・ピットなどの遺構と遺物が認められた。

1区の遺構

調査区北東から古瀬戸後期の陶器片や山茶碗片が、ごく少暈出された。21年度までの調査区では中世の遺物が認められたのは、この地点のみであった。しかしながら、他の調査区は、後世の宅地造成のため池山の一部まで掘削され、客土されていた。そのため上部の搅乱が著しく、その痕跡を留めていないので、1区のこの地点のみ中世の土泊利用があったかといえば、はつきりしない。したがって周辺の状況から類推するしかないが、1区以外についても古代から近世まで何らかの土地利用を否定するものではない。なお調査区北東から出土した中世陶器には、12世紀末～13世紀はじめの山茶碗や古瀬戸後期Ⅲの折縁深皿の小破片を含んでいた。

SD1001

調査区北東で東西方向に延び発見された。SD1001は長さ約16.2m、幅0.85m、検出上面より底面までの深さ0.15mを測る。遺構内からはカワラケや山茶碗片・弥生土器片が出土したが、山茶碗は混入の可能性があり、遺構の年代決定の判断材料とはなりえない。しかしながら弥生後期の掘立柱建物跡や溝状遺構を切っているため、遺構の新旧関係からの所見を尊重し、その年代を弥生時代後期以後、さらにカワラケの年代から中世後期の遺構と判断しておく。

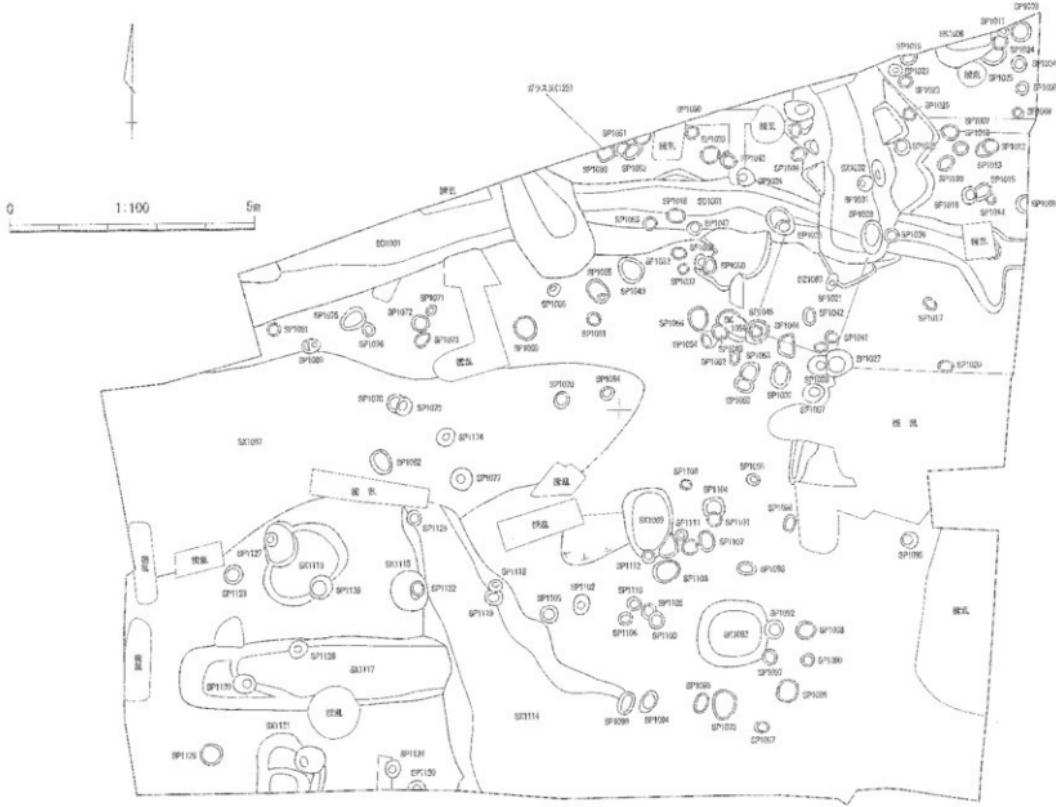
SX1002

SX1002は長さ約3.8m、幅1.4m、検出上面より底面までの深さ0.25mを測る。遺構内からは弥生後期土器片が出土した。遺構の形状が不定型で、性格不明の遺構である。

SX1067

SX1067は長さ約10.8m、幅2.7m、検出上面より底面までの深さ0.1mを測る。東西に延び、形態は不

第4图 1区全休图



定型である。遺構内からは弥生後期土器片と須恵器片が出土した。弥生後期土器の1ヶ所にまとまって出土したものは、弥生後期後葉である。出土した須恵器片は少量であるが、奈良時代の須恵器かと考えられる。遺構の最新年代を決定する資料であるが、一括出土の土器が弥生後期後葉であることから、この須恵器は混入であろう。

SX1114

SX1114は長さ約6.6m、幅1.2~3.6m、検出上面より底面までの深さ0.1mを測る。南北に延び、形態は不定型である。遺構内からは弥生後期土器片が出土した。なお弥生後期後葉の高壙1個体分と塗1個体分がほぼ元位置で出土した。

SX1117

SX1117は長さ約5.5m、幅1.4m、検出上面より底面までの深さ0.15mを測る。遺構内からは弥生土器片が出土した。この遺構はSX1114によって切られているので、それより先行する遺構である。出土した土器は弥生中期後葉と判断される。

SB1083

SB1083は東西1.8m、南北2.5m、柱穴は長径0.8~0.5m、検出上面より深さ0.22~0.17m底を測る。遺構内からは弥生土器片が出土した。この遺構の年代は、周辺から出土した土器から弥生後期と判断される。

ピット・土坑

このほかピットや土坑が認められたが、遺構の並びに統一性はなく、柱穴のような遺構とは考えられなかった。これらの遺構の一部から土器細片がわずかに出土したのみで、年代の決め手としては、やや明瞭さを欠く。しかしながら周辺から出土した土器がほぼ弥生後期後葉であることから、これをもって遺構の年代決定の判断材料としておく。なおSP1060からガラス玉1点が出土している。SK1089は壁面が高熱で赤化し、炭化物も多くみられた。時期は不明である。

2区の遺構

2区の大半が建物基礎のため広範囲にわたって深く掘削されていた。そのため掘削を免れたごく狭い範囲に遺構の一部が残り、その範囲のみ少量の遺物が検出された。1区や3区の遺構検出面と比較すると、0.5~0.4mほど低く、旧表土や基盤層まで掘削されていると考えられる。したがって2区から検出された遺構は本来の形態を留めておらず、かろうじて残存した箇所は、旧地表面を掘り下げた遺構の一部であり、その中でも深くなかった箇所は底面がかろうじて残っていたこととなろう。

第2面の遺構

SP201

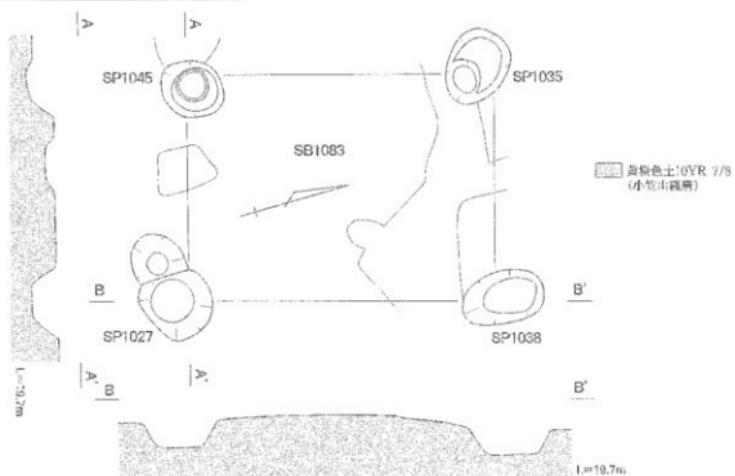
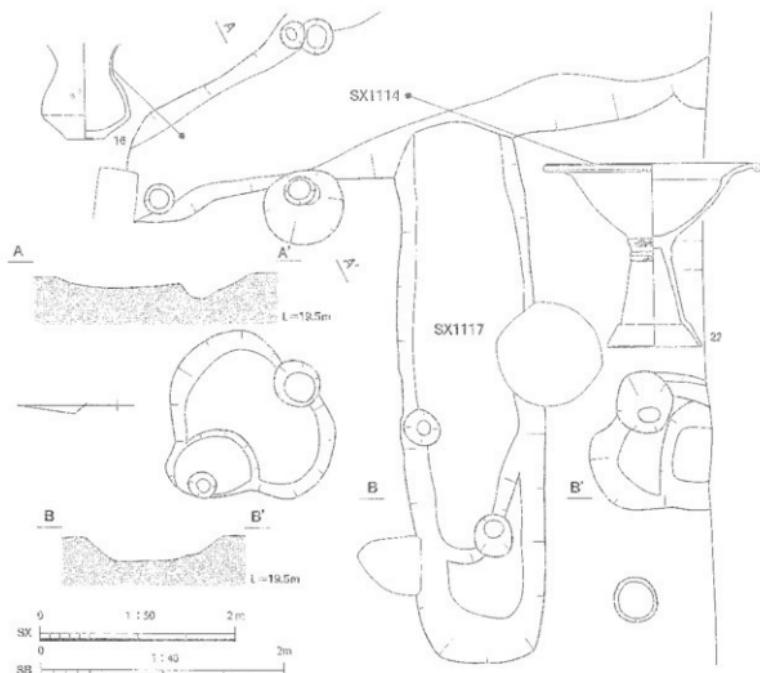
調査区西北隅から発見され、SP201と呼称した。遺構の範囲は南北1.5~1.6m、東西1.1~1.0mを測り、西側壁側が南北1.1m、東西0.4mの範囲で深くなっているが、最深部で0.1mを測る。ほとんど搅乱を受けているため、深い箇所は遺構の一部の深く掘削された箇所であるとしかわからない。この深い箇所から弥生後期の土器片が出土した。

SX201

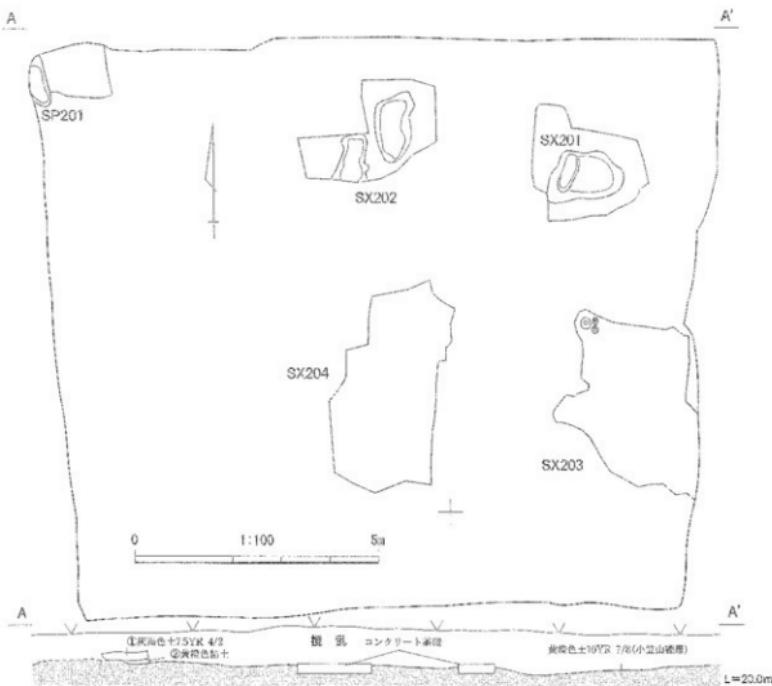
SX201の範囲は南北1.1~1.0m、東西1.5~1.6mを測り、一部が南北1.0m、東西1.6mの範囲で深くなっているが、その深さは最深部で0.15mを測る。深くなかった箇所から大形罐とともに弥生後期後葉の豆等が出土した。2区では、遺物がまとまって出土したのはこの遺構のみであるが、遺構の大半が底面のみを残すためどのような遺構であったのか、手がかりすらない。

SX202

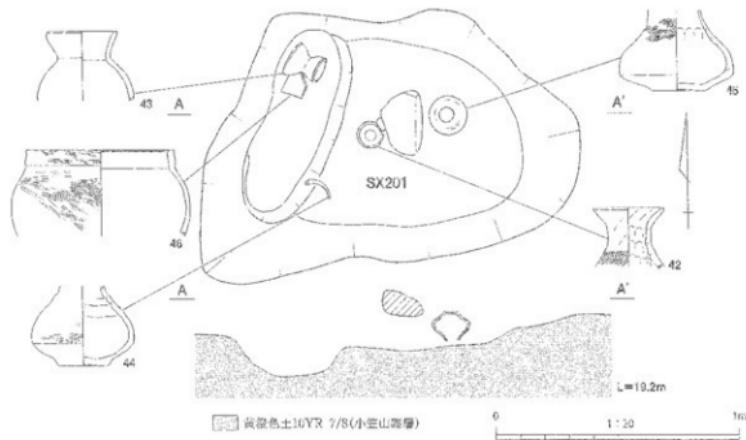
SX202の範囲は南北2.0m、東西2.9mを測り、2カ所が南北1.0m、東西0.7mと南北1.4m、東西0.7m



第5圖 1區造構平・斷面圖



第6図 2区全体図



第7図 2区選模平・断面図

で深くなっているが、その深さは最深部で0.05m前後を測る。深くなつた箇所から大形ビットや弥生後期後葉の土器片が出土した。遺構の大半が底面のみを残すためどのような遺構であったのか、手がかりすらないが、大半が消滅した土坑の一部とも考えられる。

SX203

SX203の範囲は南北3.2m、東西3.0mを測り、北西隅にピット3個が認められた。ピットの深さは最深部で0.07～0.04mを測る。遺構の大半が底面のみを残すためどのような遺構であったのか、手がかりすらない。

SX204

SX204の範囲は南北4.0m、東西1.9mを測り、遺構中央部では南北方向に土器片が出土した。遺構の大半が底面のみを残すためどのような遺構であったのか、手がかりすらない。

3区の遺構

3区は弥生時代中期から後期の豊穴住居跡・溝状遺構・土坑・ピットなどの遺構と遺物が認められた。弥生時代中期の遺構は少なく、大半が弥生時代後期後葉の遺構と判断された。遺構の検出の少ないので、調査区の搅乱が著しいことに原因があろう。

SH301

SH301は残存する範囲で東西4.2m、南北3.8mを測り、楕円方形の形態を呈する。床面まで搅乱がおよび、豊穴住居跡の堀り方や炉跡も認められず、かろうじて壁溝と柱穴と思われるピットの存在によって、遺構の認定をした。壁溝についても南側と南東がすでに擾乱によって消失していた。柱穴と考えられるピットは壁溝に3ヵ所残っていた。深さは0.24～0.1mを測る。東側の壁溝から外側に広がっている大形ピット（SP310）は、水溜や貯蔵穴であろうか。住居跡中央から單石を敲き詰めた大形ピットが検出されたが、搅乱土で埋められていたことから、近代以降の礎石建物の礎石穴と考えられる。おそらく大黒柱の礎石穴と考えられる。この住居跡の年代は、ピットや周辺から出土した土器から弥生後期と判断される。

SD301

SD301は調査区西側から南側にL字状に検出された。調査区西側壁面の北端から南端に11mほどが検出された。この部分は、遺構の上端のみの検出ではあるが、SH301に近接した位置に掘削されていたことが判明する。この遺構の覆土は黒褐色土である。SD301の南側は、底面から15cmから5cmほど浮いたレベルで土器の集中箇所が認められた。この土器は壺の上半部や下半部というようにまとまっているが、いずれも大破片で、接合して1個体となる例は認められない。このことから土器を別の場所で割り、破片のまま、ここに置いたといえる状況であった。

SD302

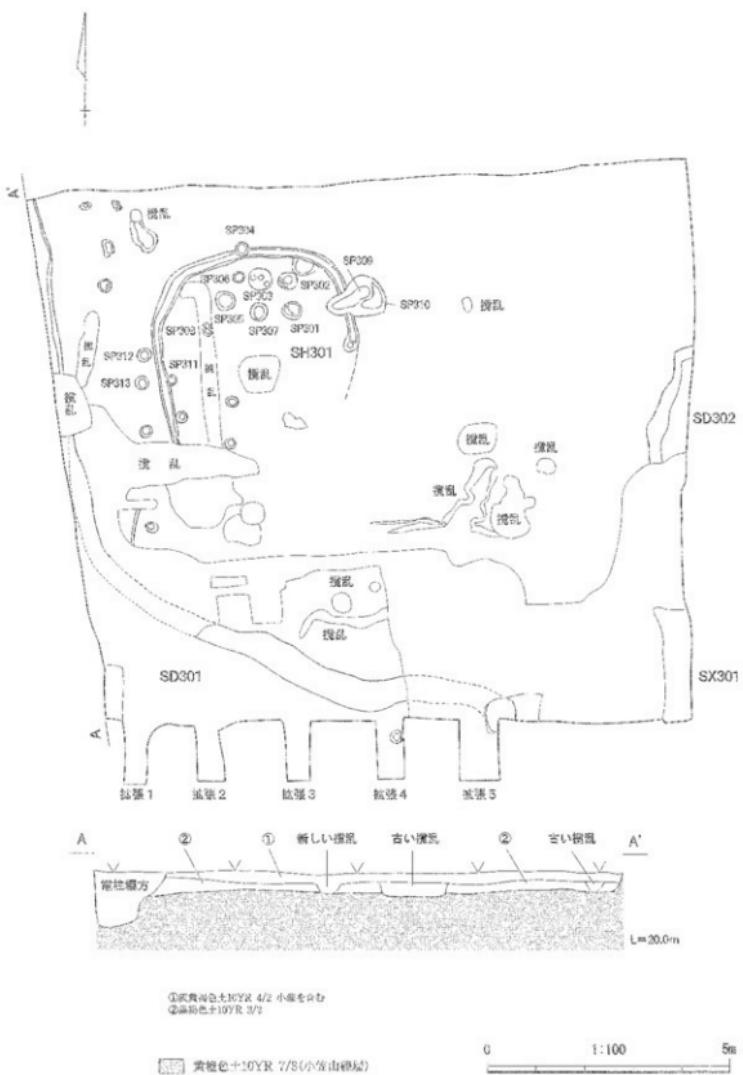
SD302は調査区東側隅から検出された。南端は大きく搅乱を受けているため、残りはよくない。深さは、検出面から0.15mほどを確認した。この遺構の覆土は黒褐色土である。弥生後期の土器片がわずかに出土したことから、この時期の遺構と考えられる。

SX301

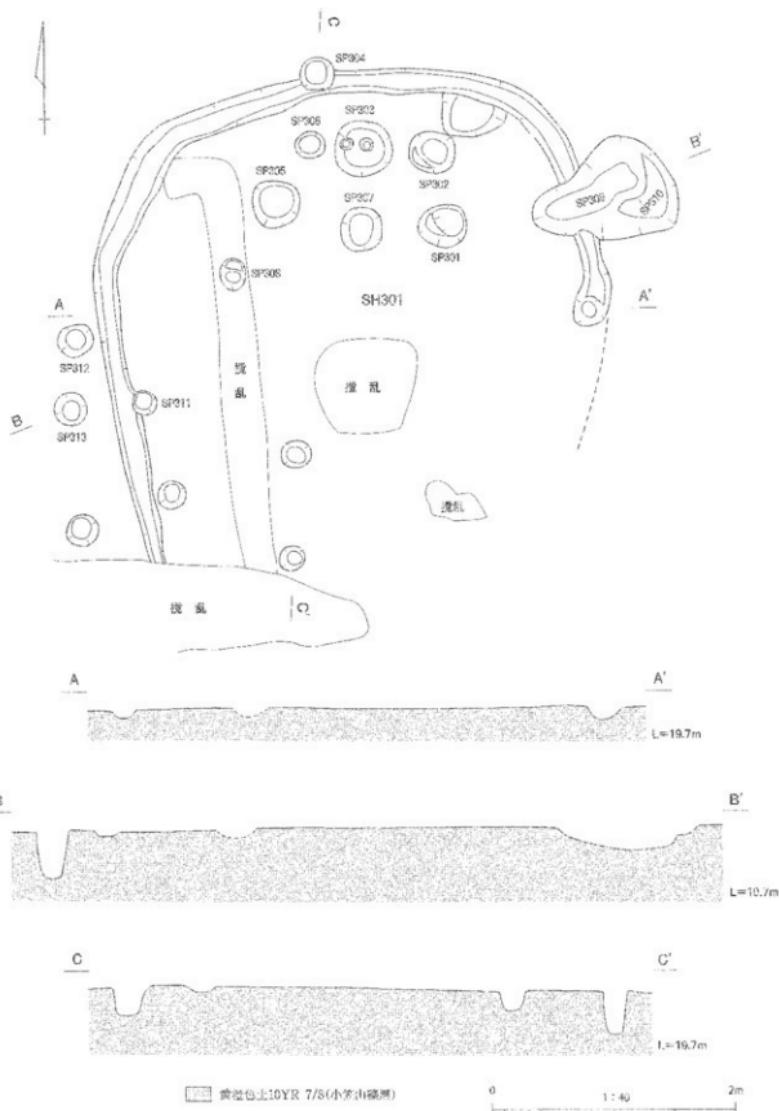
SX301は調査区東南隅から検出した。かろうじて搅乱のおよんでいないこの範囲は、東西0.7m、南北2.3mを測り、底面は平坦である。一部で炭の小片があったが、張り床のような兆候はなく、住居跡の一部である可能性は少ない。この遺構の年代は出土した土器から弥生中期後葉と判断される。

4区の遺構

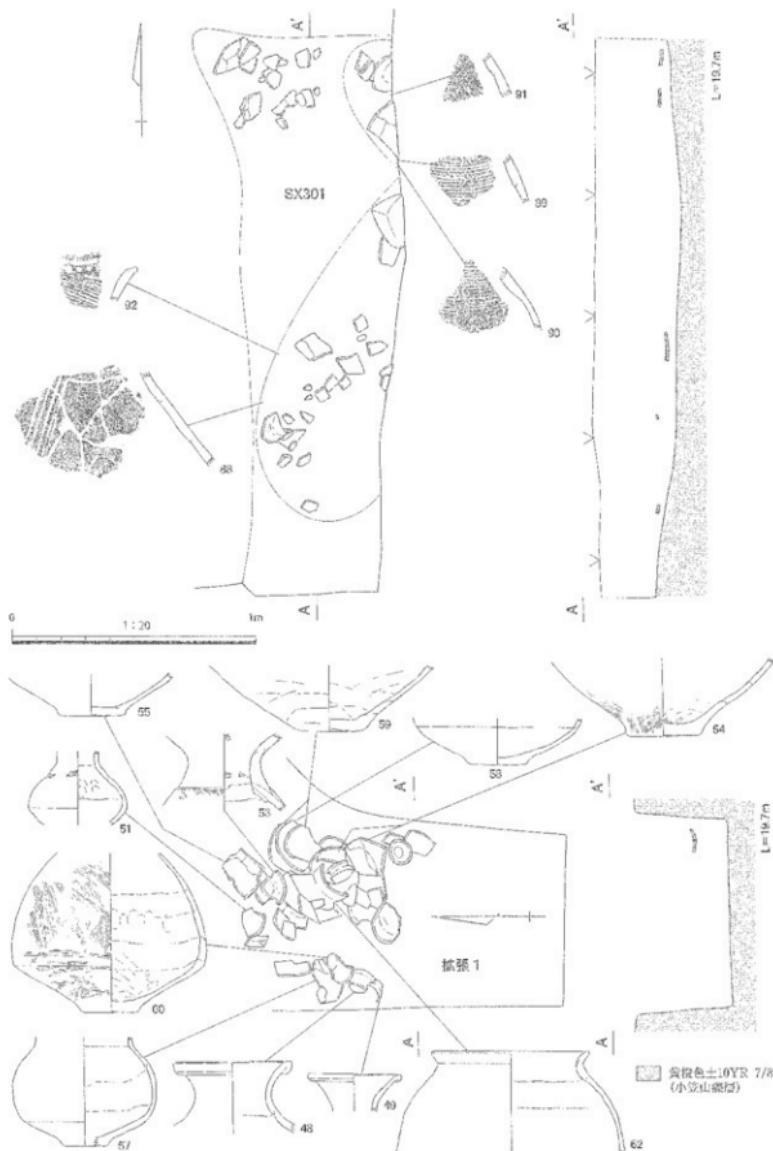
4区からは弥生時代中期から後期の溝状遺構・土坑・ピットなどの遺構と遺物が認められた。弥生時代中期の遺構はSD404のみで、大半が弥生時代後期後葉の遺構と判断された。調査区には、80年前に建



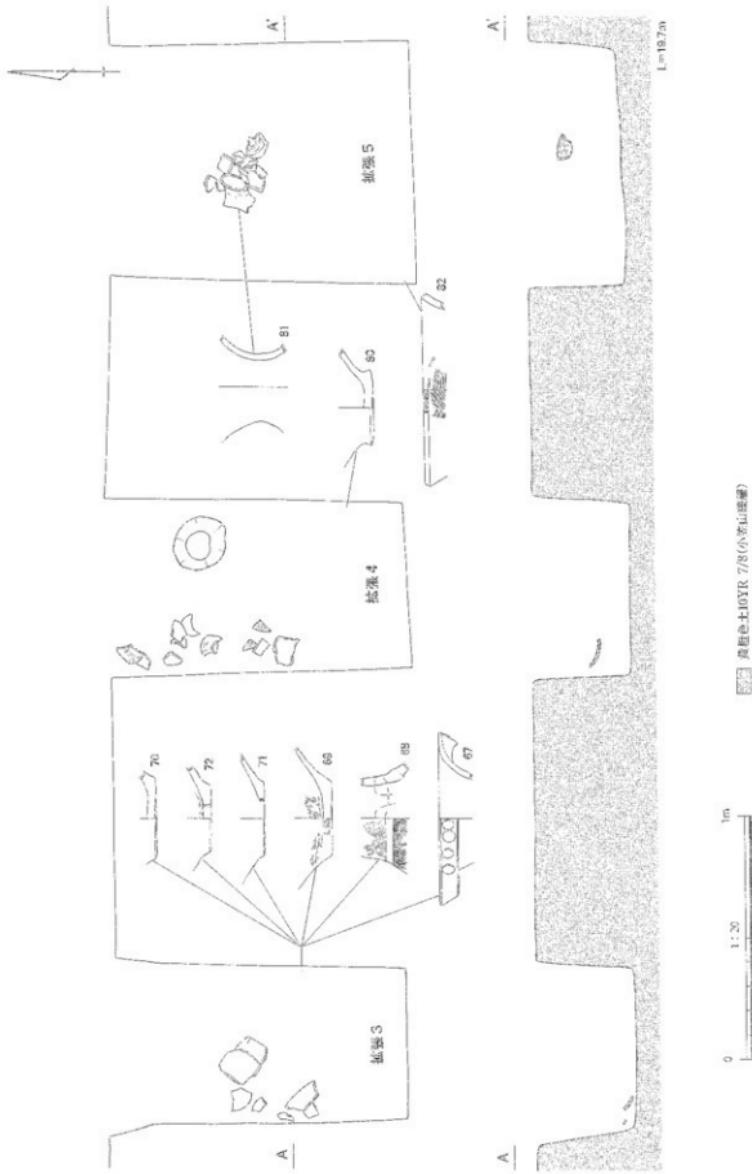
第 6 図 3 区全体図



第9図 3区遺構平・断面図(1)



第10図 3区透構平・断面図(2)



第11图 3风道横草·断面图(3)

てられた居宅の基礎である布堀地盤の堀方が溝状に残っていたこと、竪柱の堀方が深く掘り込まれていた以外、擾乱はあまり認められなかった。なお擾乱の埋め土は遺構覆土とは明瞭な違いがあったため、遺構の認識は明瞭であった。擾乱土の多くは表土除去の段階で取り除き、遺構検出面に残るものについて、人力により掘り下げた。遺構のスケールは別表に掲げ、煩雑にならないようにした。

またこの調査区で遺構覆土から出土した大半の土器片が、弥生後期の土器片であるため、この4区で検出された遺構の多くは、ほぼ弥生後期と判断してさしつかえないであろう。

SD401

SD401は調査区西側に位置し、調査区北側から南側に直線状に検出された。この遺構の覆土は暗褐色土である。SD401の深さは0.15m前後である。弥生後期の土器小破片が出土した。

SD402

SD402は調査区西側から中央部に検出され、調査区東側ではやや南にふれて検出された。覆土は同じ暗褐色土である。深さは、検出面から0.1m前後である。弥生後期の土器片がわずかに出土したことから、この時期の遺構と考えられる。

SD403

SD403は調査区中央部北側に位置し、調査区北側から南側にやや東西にふれて検出された。覆土は同じ暗褐色土である。深さは、検出面から0.15m前後である。弥生後期の土器片がわずかに出土したことから、この時期の遺構と考えられる。

SD404

SD404は調査区東側に位置し、調査区南北の方向に長軸を向けて直線状に検出された。覆土は同じ暗褐色土である。深さは、検出面から0.15m前後である。西側外側の輪郭が二段となっていることから、掘り直し、もしくは2条の溝の可能性が高い。底面から弥生中期の土器がまとまって出土したことから、この時期の遺構と考えられる。

SK401

SK401は調査区中央部から検出した。中央部は擾乱溝がおよんでいる。この遺構の長軸方向は東西方向である。遺構の覆土には弥生後期の土器が含まれている。覆土は暗褐色土である。

SK402

SK402は調査区南西から検出された。長軸方向は南北方向である。覆土は暗褐色土である。覆土下位から土器片が出土したが、その時期は弥生後期である。

SK403

SK403は調査区中央南から検出された。覆土は暗褐色土である。弥生後期の土器片がわずかに出土したことから、この時期の遺構と考えられる。

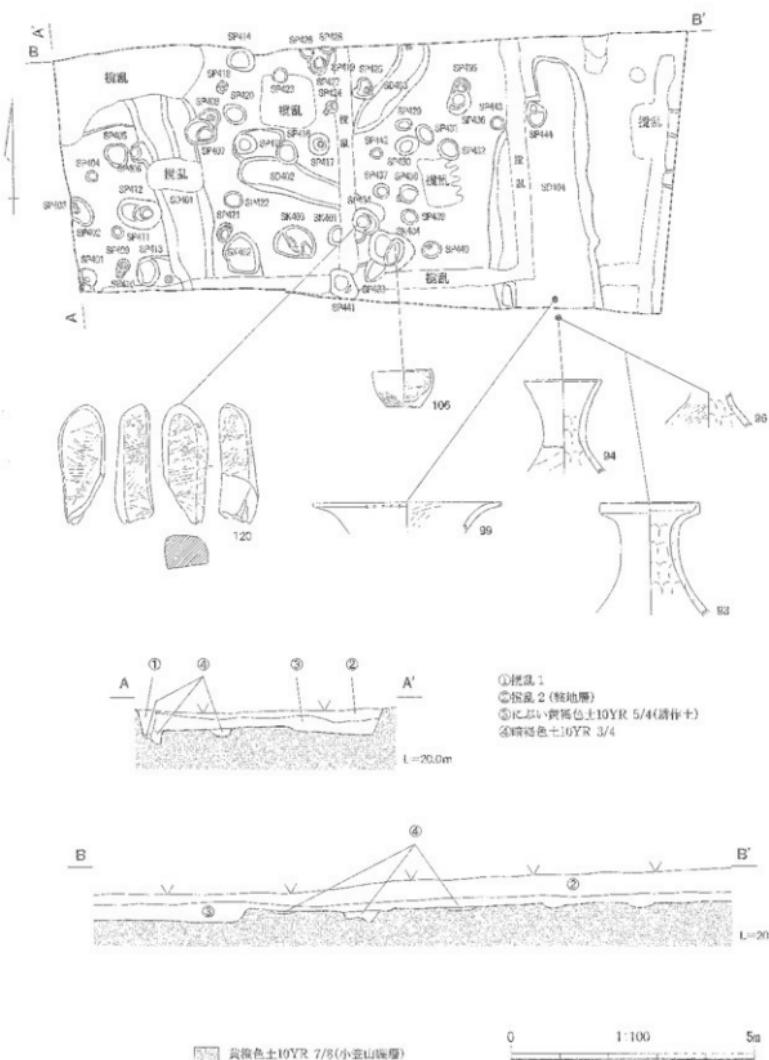
SK404

SK404は調査区中央よりやや南東から検出された。覆土は暗褐色土である。遺構の北側から完形の鉢形土器が出土した。土器は弥生後期に属し、この時期の遺構と考えられる。

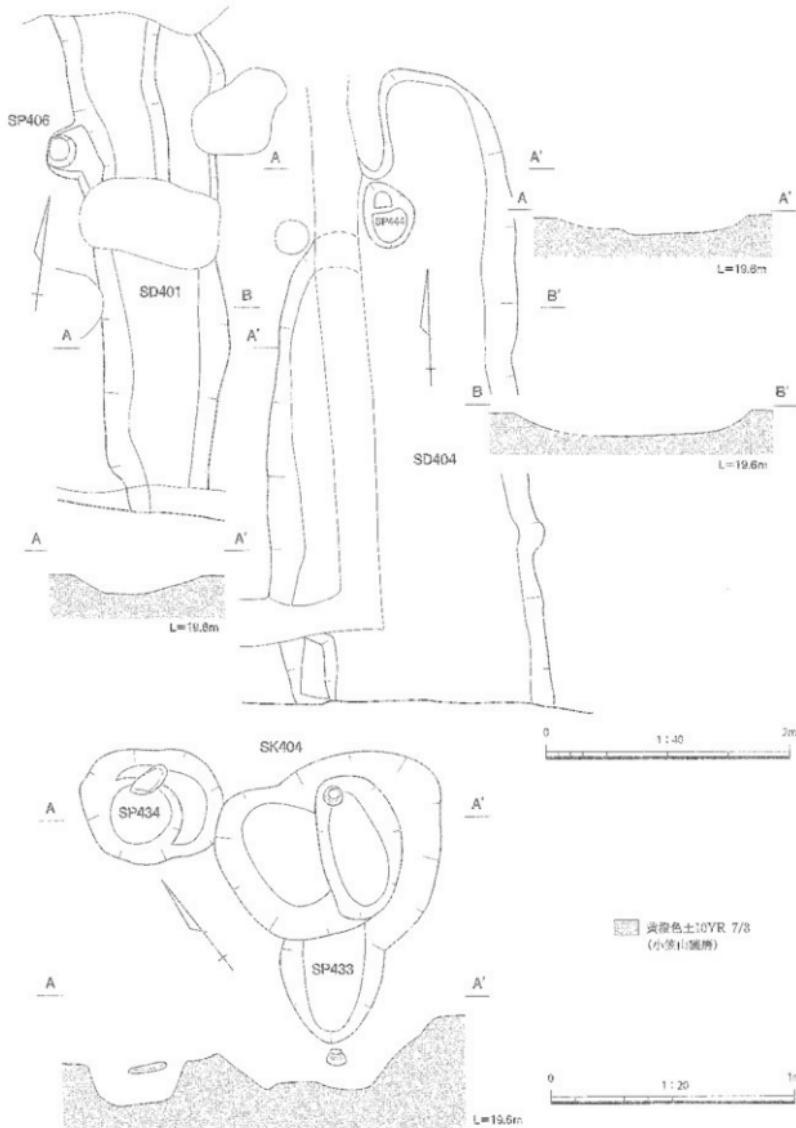
ピット

このほかピット44基が認められたが、ピットの並びに統一性はなく、柱穴とみられるピットについても並びから掘立柱跡物跡は復元できなかった。これらの遺構の一部から土器細片がわずかに出土したのみで、年代の決め手としては、やや明瞭さを欠くが、SP439に弥生中期前葉から中葉の土器が認められたほか、弥生後期の破片と思われる例が多い。

なおSP434からは小笠山礫層にある砂岩を使用した砾石が出土しているが、手元にある砾を簡便に使用した感は否めない。



第12圖 4区全体図



第13図 4区縦横平・断面図

5区の遺構

5区は弥生時代中期から後期の溝状遺構・土坑・ピットなどの遺構と遺物が認められた。弥生時代中期の遺構はSX501のみで、大半が弥生時代後期後業の遺構と判断された。擾乱については多くは煉瓦や現代の玩具や陶磁器片があり、遺構覆土とは明瞭な違いがあった。遺構の検出の少ないのは、調査区の擾乱が著しいことに原因があろう。擾乱土は表土除去の段階で取り除いているため、この調査区で出土した大半が弥生土器片であるため、この回検出された遺構は、ほぼ弥生後期と判断してさしつかえないであろう。

SD501

SD501は調査区東側から南側にL字状に検出された。調査区東側壁面から5mほど西へ延び、そこから南端に9mほどが検出された。東部分では、SX501を削除していることから、それより新しい遺構であることが判明する。この遺構の覆土は暗褐色土である。SD501の深さは0.3~0.2mである。

SD502

SD502は調査区東側から検出された。SD501に合流するが、両者とも覆土は同じ暗褐色土であるため、前後関係は不明である。深さは、検出面から0.1mほどを確認した。弥生後期の土器片がわずかに出土したことから、この時期の遺構と考えられる。

SX501

SX501は調査区東北隅から検出された。かろうじて擾乱のおよんでいない範囲は、南北2.9m、東西0.9mを測り、底面は平坦であるが、中心部がやや低い。覆土の一部で炭の小片があったが、張り床のような兆候はなく、住居跡の一部である可能性は少ない。この遺構の底面から出土した土器は種類が多く、その時期は弥生中期後業と判断される。遺構の覆土には弥生後期の土器も含まれているが、本遺構の一部がSD501と重複しているため分離できず、取り上げたためであろうか。

SK501

SK501は調査区北側から検出された。長径1.35mを測り、覆土は暗褐色土である。台付壺の脚部片が覆土下位から出土したが、その時期は弥生後期である。遺構の深さは検出面から0.25mほどを確認した。

SK502

SK502は調査区中央よりやや南から検出された。覆土は暗褐色土である。南北1.0m、東西0.7mを測り、深さは検出面から0.3mほどを確認した。弥生後期の土器片がわずかに出土したことから、この時期の遺構と考えられる。

SK503

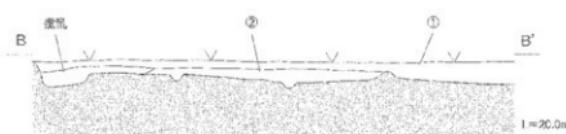
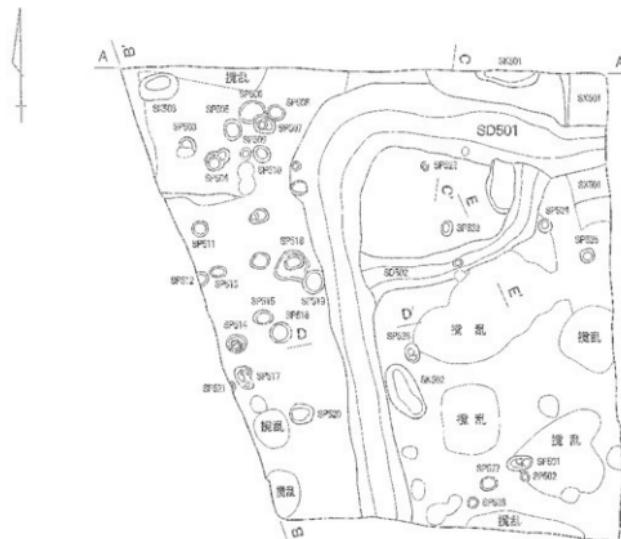
SK503は調査区西北から検出された。覆土は暗褐色土である。南北0.6m、東西0.8mを測り、深さは検出面から0.25mほどを確認した。弥生後期の土器片がわずかに出土したことから、この時期の遺構と考えられる。

ピット

このほかピットが認められたが、ピットの並びに統一性はなく、柱穴とみられるピットについても並びから獨立柱建物跡は復元できなかった。これらの遺構の一部から土器細片がわずかに出土したのみで、年代の決め手としては、やや明確さを欠く。

6区の遺構

6区は弥生時代中期から後期の溝状遺構・土坑・ピットなどの遺構と遺物が認められた。出土した土器により、遺構の年代については、SP614・SP618のみが弥生時代中期の遺構であった。そのほかの遺構出土の土器から判断すると、今回検出された遺構の多くは、ほぼ弥生後期と考えてさしつかえないであろう。

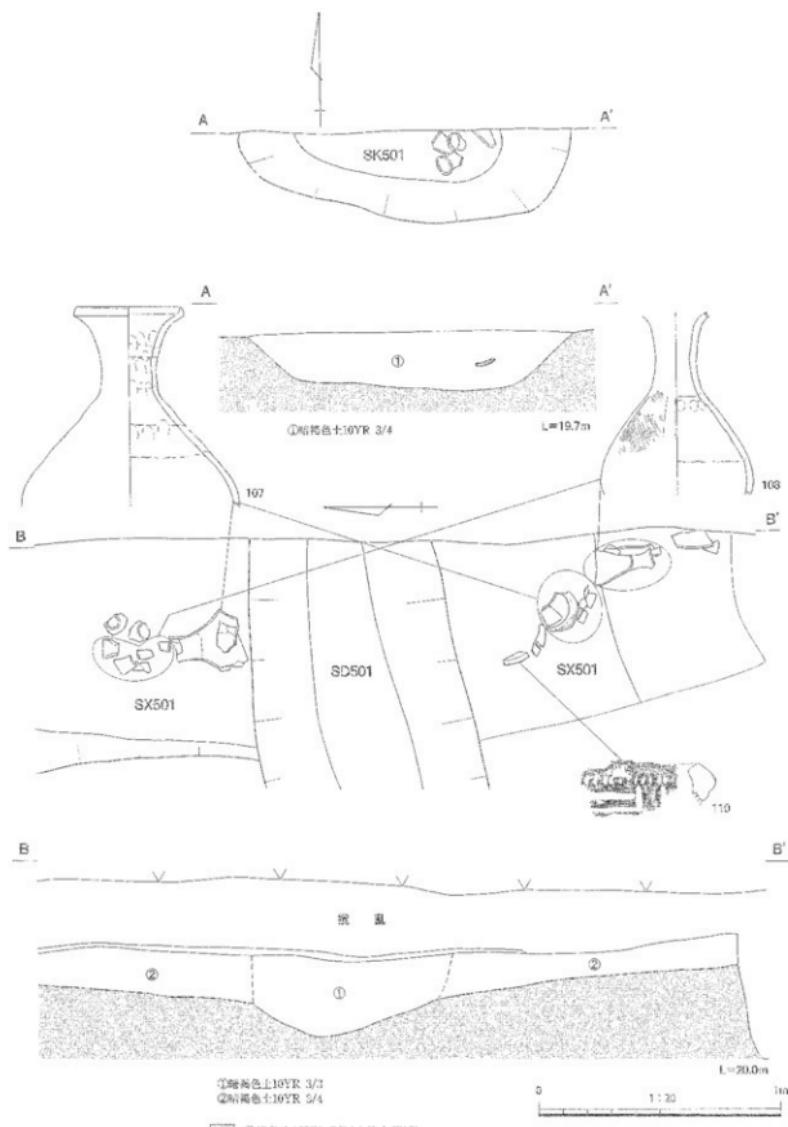


①暗褐色土10YR 7/3(粘粒層・バラス)
②暗褐色土10YR 3/4
■ 淡棕色土10YR 7/3(小笠山鉱層)

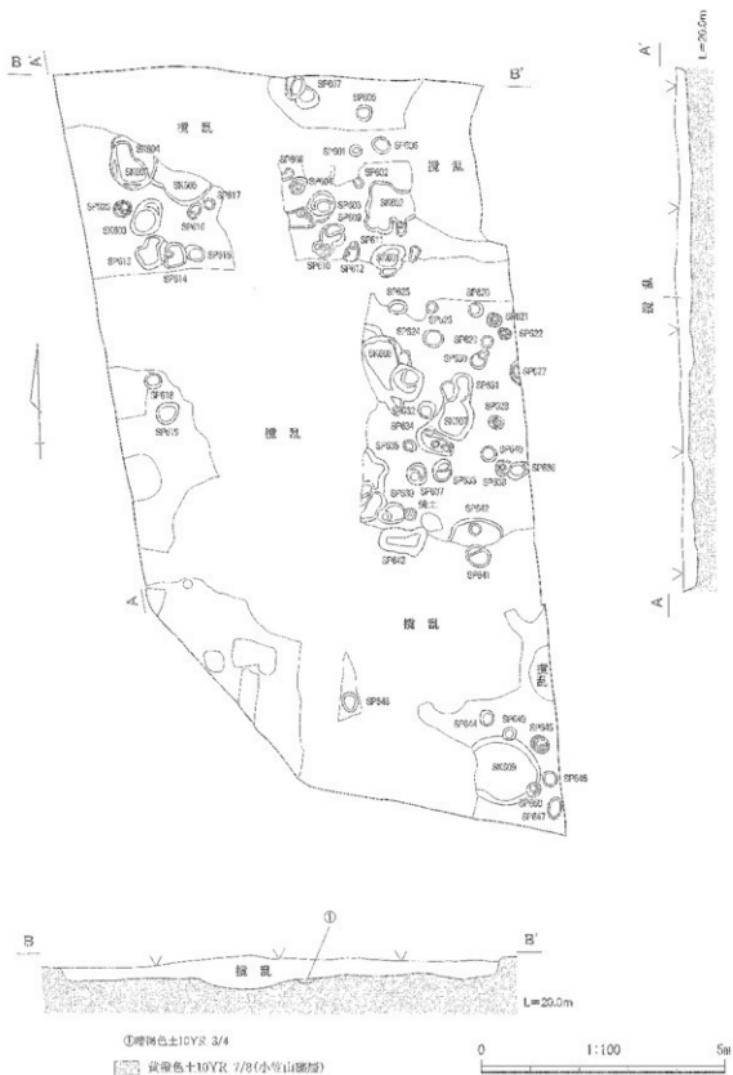


0 1:100 5m

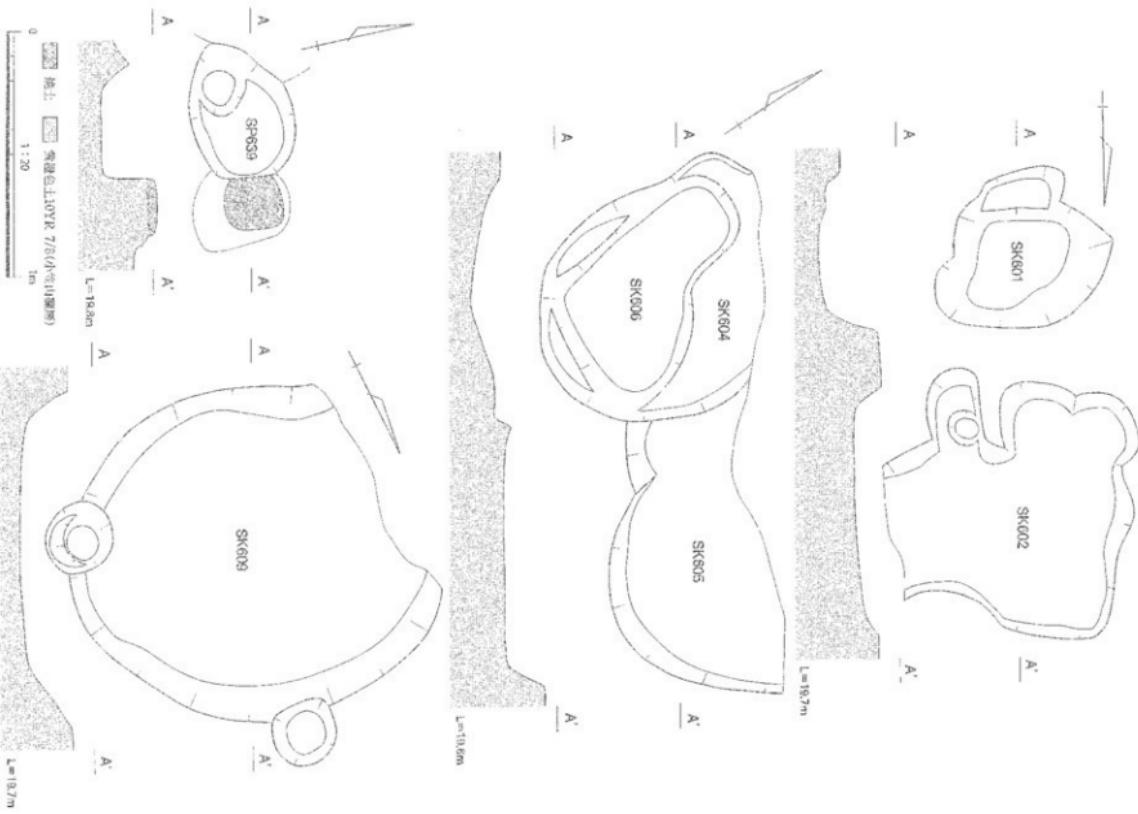
第14図 5区全体図



第15圖 5區遺構平・断面図



第16図 6区全体図



搅乱穴については焼瓦やビニール管、瓦礫が入り、弥生時代の遺構覆土とは明瞭な違いがあった。調査面積に比べ遺構の検出の少ないのは、調査区の搅乱が著しく、遺構面の残存状況が不良であったことによる。搅乱土の多くを表土除去の段階で取り除き、なおかつ覆土に違いがあったため混入は少ないと判断される。

SK601

SK601は調査区北東から検出された。この遺構の覆土は暗褐色土である。SK601の深さは0.24mである。覆土から出土した土器細片からは時期比定は困難である。

SK602

SK602は調査区北東から検出された。覆土は暗褐色土である。出土土器はなく、時期不明の遺構である。

SK603

SK603は調査区北西から検出された。覆土は暗褐色土である。出土土器はなく、時期不明の遺構である。

SK604～SK606

SK604～SK606は調査区北西からそれぞれ一部を重複して検出された。覆土は暗褐色土である。出土土器はなく、時期不明の遺構である。

SK607

SK607は調査区中央よりやや東から検出された。覆土は暗褐色土である。弥生後期の土器片がわずかに出土したことから、この時期の遺構と考えられる。

SK608

SK608は調査区中央北東から検出された。覆土は暗褐色土で出土土器はなく、時期不明の遺構である。

SK609

SK609は調査区南東から検出された。覆土は暗褐色土である。弥生後期の土器片が出土したことから、この時期の遺構と考えられる。周囲にピットが巡っているが、この遺構と関連するかもしれない。

焼土

調査区中央部の東側で焼土が認められた。住居跡の痕跡の可能性もあったが、周囲が搅乱されているため、竪穴住居跡の輪郭などは認められず、単に焼土とした。

ピット

このほかピットが認められたが、ピットの並びに統一性はなく、柱穴とみられるピットについても並びから掘立柱建物跡は復元できなかった。ピットの時期については、SP618の覆土から弥生中期前葉の土器が出土しているため、その時期に比定する。SP641からは弥生中期後葉の土器片が出土しているため、この時期の遺構に比定したい。他の遺構の一部からは土器細片がわずかに出土したのみであるため、年代の決め手としてはやや明確さを欠くが、焼成などから弥生後期と考えられ、ピットの一部が弥生後期の遺構と判断される。

第2節 出土遺物

今回の調査において出土した遺物の多くは、弥生土器を中心とするもので、それ以外の時代を示す遺物はきわめて少ない。

第2節の記述は弥生土器を主体とし、それ以外の遺物は少ないため、従となる。そのため記述は各区の遺構の年代を示す土器を、貯蔵容器である壺、供獻容器である高杯、煮沸容器である壺もしくは深鉢を各区遺構を中心に区別して提示し、そのうち遺構に伴わない土器や時代の特徴があまり明確でないものを提示する。

本文で記載する土器は、東遠江地域に分布する弥生中期の白岩式（壺式）土器（秋野谷正宏 2000）と後期の菊川式（壺式）土器である。本文の中では、その土器の時期という意味で、それぞれを白岩（様式）期、菊川（様式）期とし、記述する。白岩式～菊川式弥生土器については岸本貴氏の、丸子式土器については平野吾郎氏の教示と助言をえたことを明記する。

1区の出土遺物

2は中世のカワラケである。それ以外は弥生土器とガラス玉である。1は菊川期新相の高杯で、壺部と脚部の境界に羽状紋を施す。2はSD1001から出土した口径11.7cm、器高2cmを測るカワラケ中皿である。色調は橙色を呈し赤カワラケに属する。手づくね成形で底部には4、5cm幅のスノコ状圧痕が残る。15世紀後半から16世紀前半に属すと考えられる。

3～12はSX1067から出土した壺類である。3～6は折り返し口縁のグループ、7～9は単純口縁のグループである。3は口端部外側に刺突による刻み目を施す。4は口縁内面に單斜方向の纏紋を施す。8は小型壺で口縁端部を面取りし、胴部上位から中位に2段の羽状紋を施す。外面の紋様帶以外は口縁部に細かいヘケ目調整を施す。胴部下位に丹塗り痕がわずかに残る。13は高杯、14は合付壺で、接合部を指で押圧している。いずれもSX1067から出土した

15～22はSX1114から出土した土器である。15は口縁端部を面取りし、胴部に1段の羽状紋を施す。17は脚部と口縁部の境界で大きく接合するため段を持ち、その段の上に羽状刺突紋を施すタイプである。このタイプは有段羽状紋壺と呼ばれ、菊川期の新相に相当する。18は細頸壺で胴部上位に單斜方向の纏文を施す。このように纏文施紋の白岩期の壺は類例は少なく、白岩Ⅲ期にわずかにみられ、後期初頭まで続く特徴である。22は脚部が「ハ」の字状に広がり、脚辺上位に羽状紋を施す。菊川期新相の高杯である。21も同じタイプの高杯である。

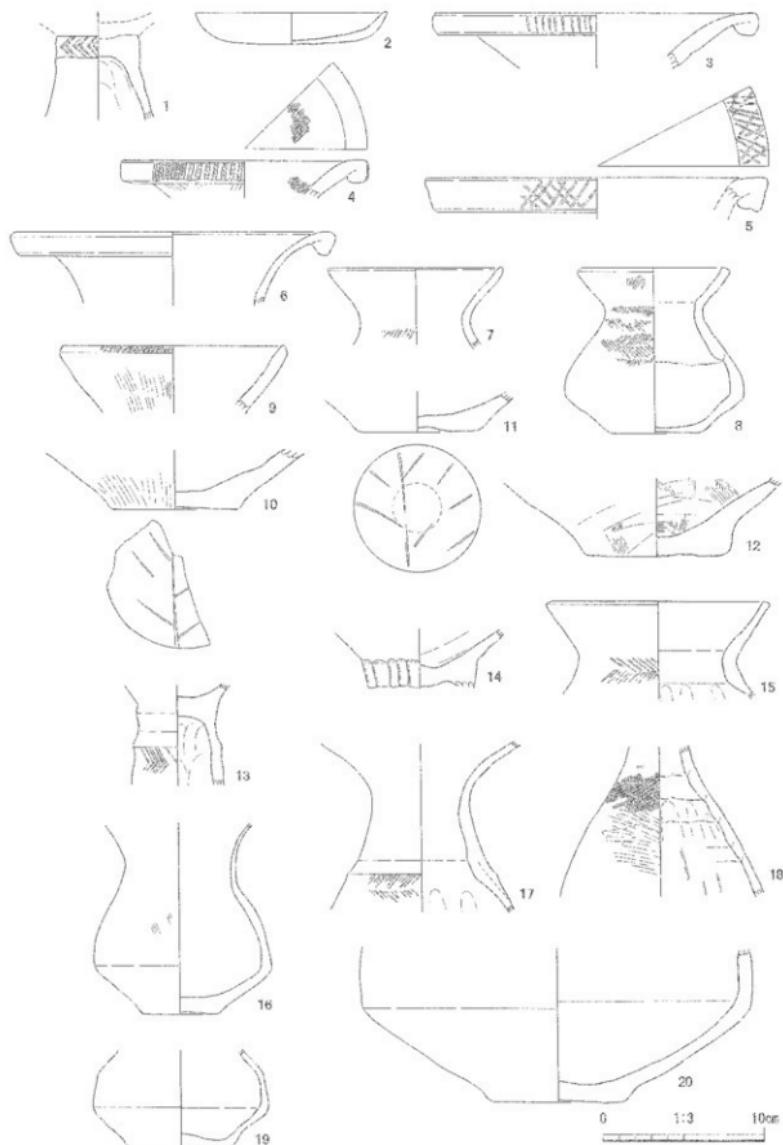
23～32はSX1117から出土した土器である。細頸の壺と高杯脚部・合付壺等である。ともに白岩期に属する。33はSX1121から出土した。弥生後期菊川期新相の合付壺である。34はSP1084から出土した弥生後期の壺底部である。35は細頸の単純口縁の壺である。白岩Ⅲ期にわずかに見られ、後期初頭まで続く型式的特徴をもつ。36は壺の肩部であり、弧状に沈線を巡らす。南東部包含層から出土した。白岩式か、それ以前の横田式土器の壺である。37は包含層出土で、丸子式土器の壺底部である。全調在区では、もっとも古い時期を示す。38は壺の肩部であり、刺突紋を5段程巡らす。その帰属時期は不明であるが、白岩期の新しい段階から菊川式古段階であろうか。39は焼成や胎土から、菊川式土器そのものであるが、その胎土、焼成は他の大門遺跡出土の菊川式土器とは異なる。他地域からの搬入品と考えられる。40は複合口縁の浅鉢または短頸壺であるが、その時期は菊川期新相である。包含層からの出土である。41は口縁部外側に刺突による刻み目を施す高杯である。時期は菊川期新相である。

2区の出土遺物

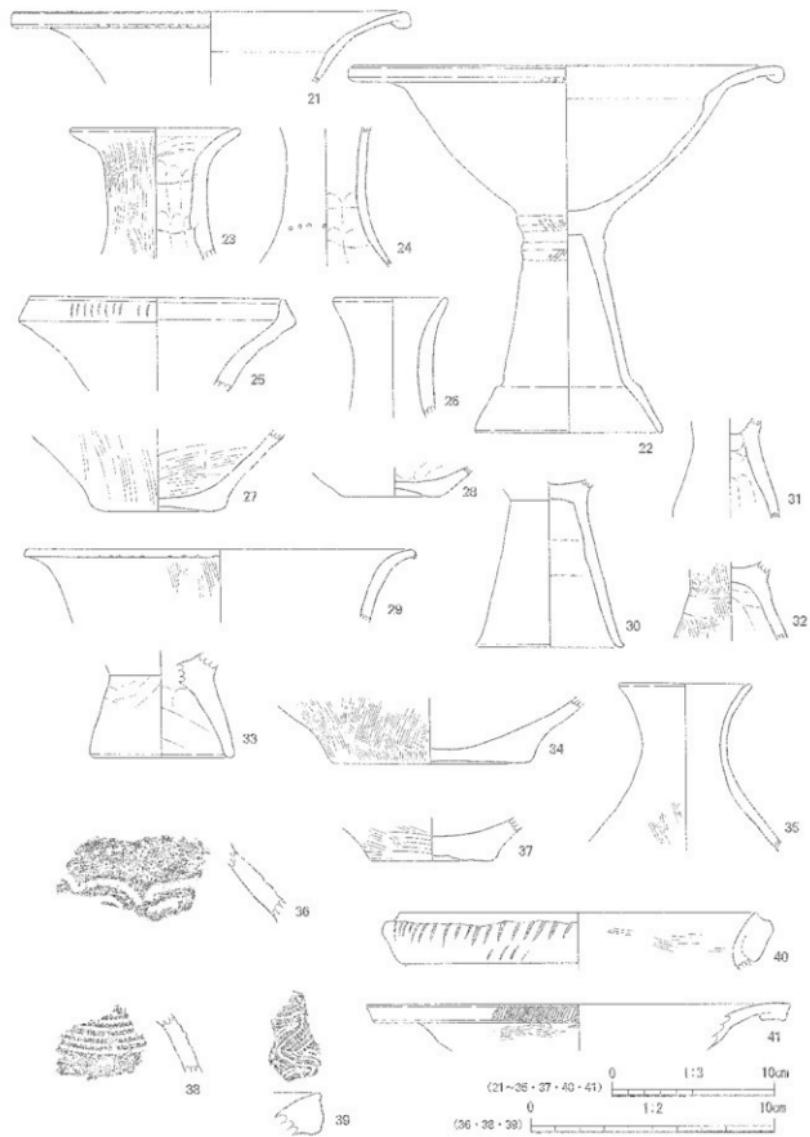
42～46はSX201から出土した土器である。42は単純口縁で、胴部上位から中位に1段の羽状紋を施す。43は単純口縁で無紋のタイプである。45は脚部と口縁部の境界に羽状刺突を施すタイプで、下脚部が大きく広がっている。44は下脚部に最大径をもつタイプ、46は口縁部を直立気味で、端を平坦につくる壺である。いずれも菊川期の新相に相当する。47は脚部と口縁部の境界で接合し、段をつくっている。その段の上には斜めにヘラ描きを施す。SX202から出土した壺である。菊川期の新相に相当する。

3区の出土遺物

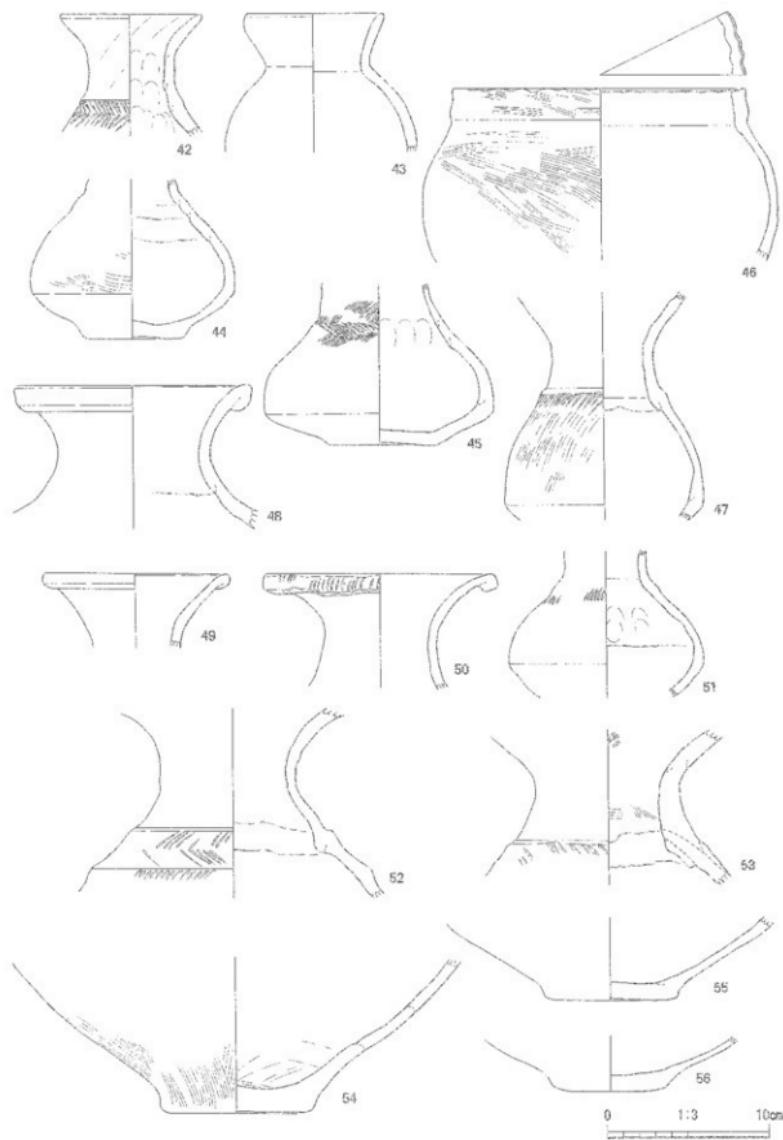
48～86はSD301から出土した土器である。土器が集中して出土した範囲は拡張区1・3～5であり、土器の出土レベルは、滑状櫛模の底面から浮いていた。このことから、土器は溝の埋没途中に、それぞれまとまって廃棄された状態であり、これらの土器の間には、時期差は認められないと判断される。48～50、61は折り返し口縁の壺、52・53は脚部と口縁部の境界で接合し、段をつくる壺である。52は脚部上位か



第18图 出土遗物实测图(1)

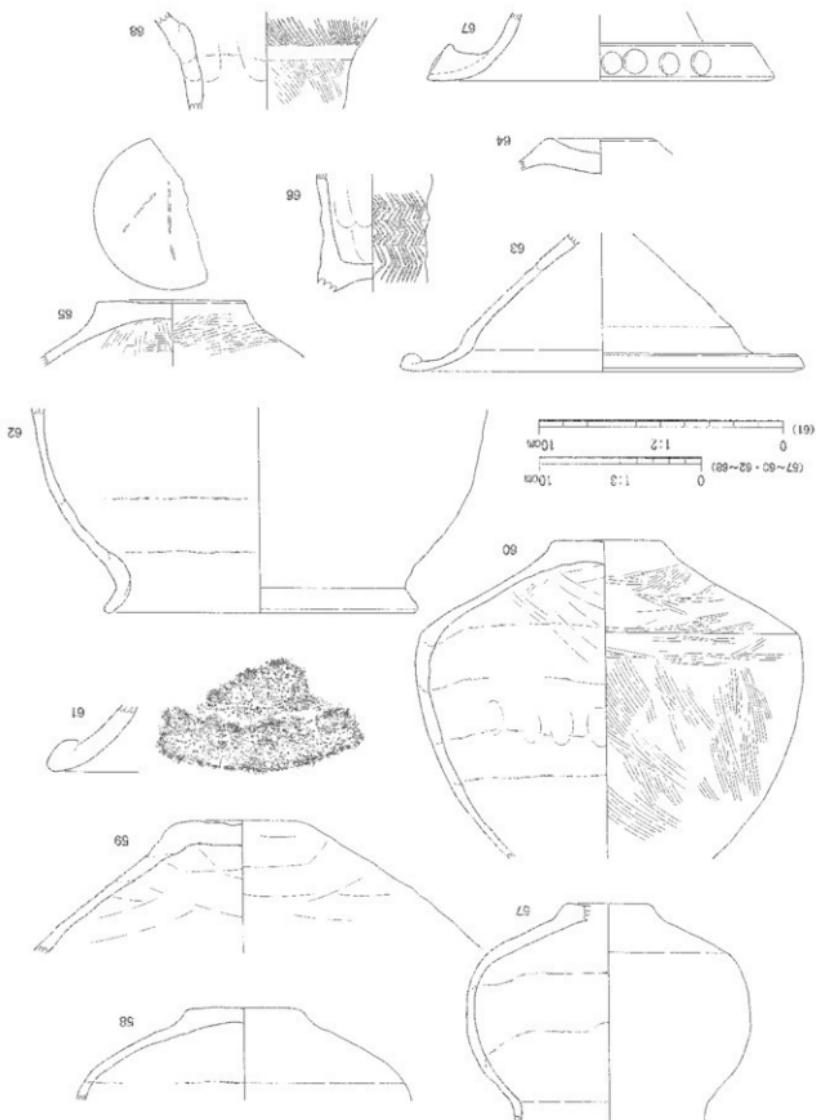


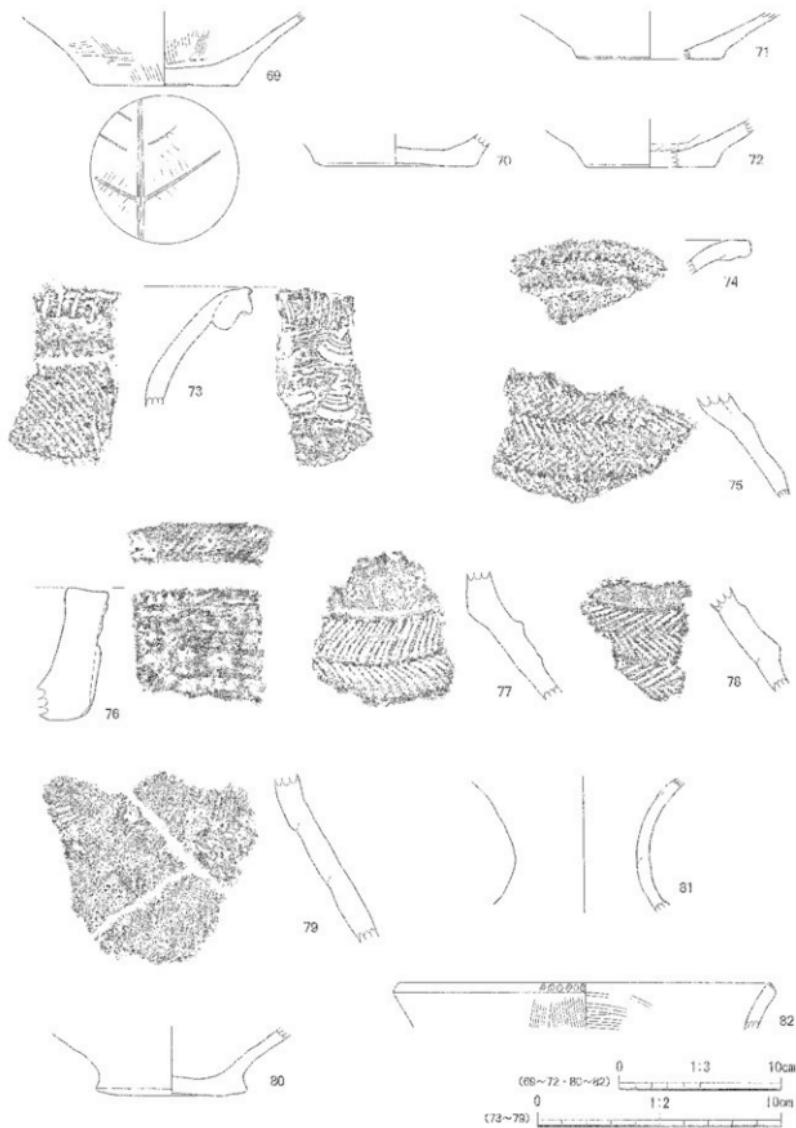
第19圖 出土遺物實測圖(2)



第20圖 出土遺物測量圖(3)

第21圖 出土遺物測量圖(4)





第22図 出土遺物実測図(5)

ら中位に1段ないし2段の羽状紋を施す。53は斜めにヘラ括き斜行歯を施す。54～60は胴部と底部の破片で、下脚部が大きく広がっている。63・66は高杯、62は脚部と口縁部の短い甕である。括弧区1の壺に伴うと考えられる。66は高杯で、3段の羽状紋を施している。67は口縁部を肥厚させ円形浮紋を貼付する。胎土や焼成から在地産とみられる。68は脚部と口縁部の境界で接合し、段をつくる壺である。いずれも菊川期新様に相当する。64は白岩期の壺で覆土から出土した。

69～81は括弧区3～5から出土した壺形土器である。73はやや幅広の折り返し口縁で、内面に瓣状紋を2段施す。74は折り返し口縁、76は複台口縁の壺である。口端部に橢状器具による刺突紋を施す。82は幅広の口縁で脚部に刻みを入れ、内側に荒いハケ調整を施す壺である。

87はSP301から出土した台付壺である。白岩期に属する。

88～92はSX301から出土した壺・壺形土器である。出土状態から同じ時期の一括遺物であろう。88の壺は沈線による長方形の区画紋や89・90のような擬似流水紋を施す。92の壺は荒いハケ調整を施し、円形の刻み目を施す。白岩II式の土器である。

4区の出土遺物

93～106は4区から出土した土器である。ピットなど遺構から出土した土器が多いが、指先大の細片が多く時期比定は困難である。白岩式土器を除いて、その多くは胎土・色調の特徴から弥生後期の土器と考えられる。

SD404の底面からわずかに浮いた状態で、まとまって出土した土器である。出土状態から同じ時期の一括遺物であろう。93はわずかに内傾する受口口縁壺で、紋様は施されていない。94は素縁の細頸壺で、肩部と頸部の境界に細い沈線を1条施す。95・96は細頸壺で外面を縱方向の刷毛目調整を施している。97は横線文と格子目紋を2段に施している壺である。98は高杯である。99は壺で、口端部に突刺紋を巡らす。

100は内傾する受口口縁壺で、口縁部外面には幅広でやや深い沈線を施している。西遼江から三河に分布する長床式土器の凹線紋を施す壺があるが、その影響を受けているのであろうか。あるいはそれ以前の別型式であるかの判断はできない。101の壺は低い凸帶を巡らしている。口縁部破片と推定し図化したが、あるいは脚部との境界付近かもしれない。100とともに弥生中期土器である。102の細頸壺は頸部中位に突刺紋を巡らす。103は壺脚部に横線紋を施す。104は外面に瘤状の条痕調整を、口端部外面には刻み目を施している。105は壺で口端部下位に沈線を施している。SD404出土土器は壺・壺・高杯の特徴から白岩期の様相を呈している。

106は小形の鉢で、SK404から完形で出土した。外面には刷毛目調整を施している。菊川式土器であるが、類例は少ない。

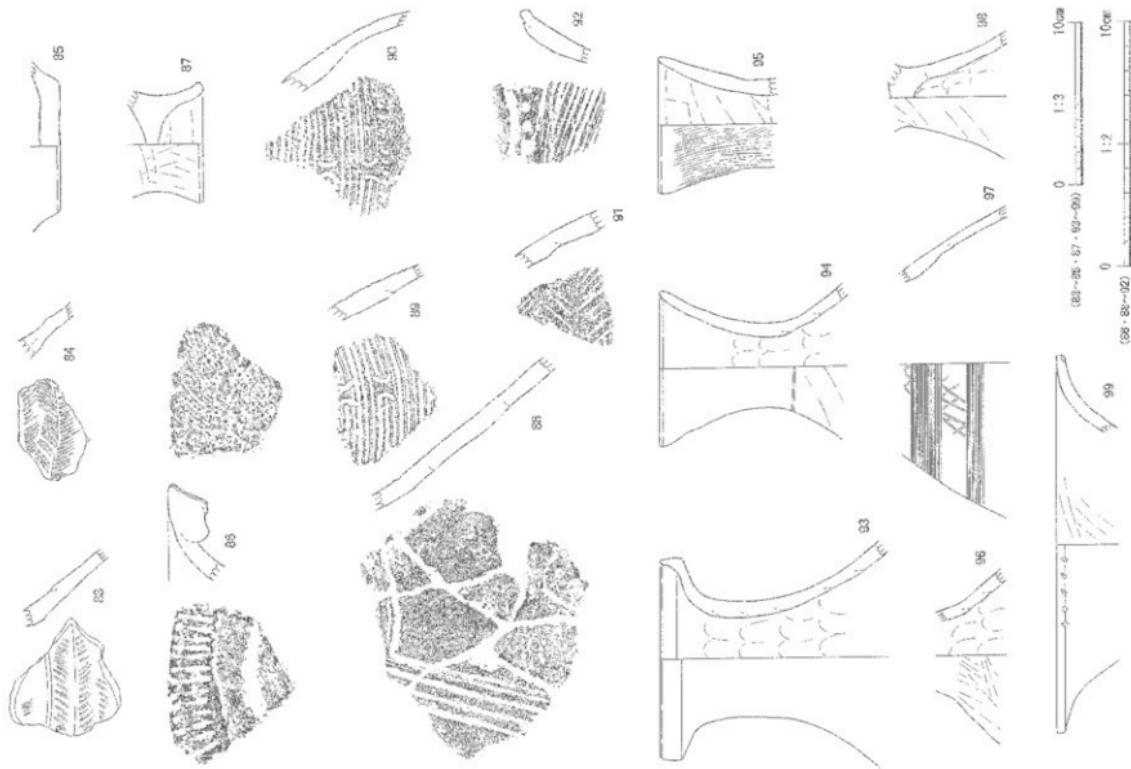
5区の出土遺物

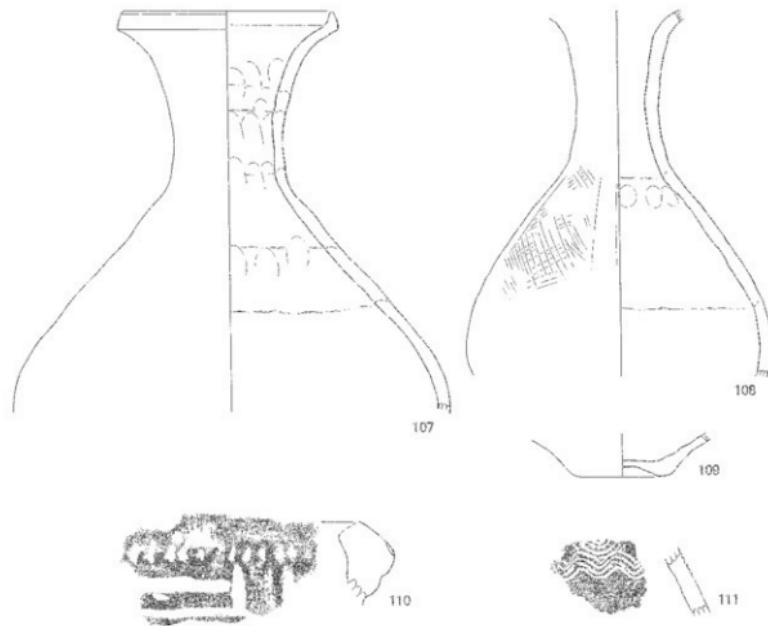
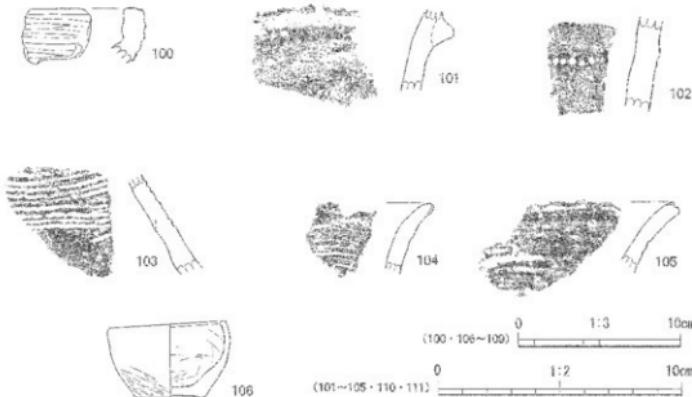
107～113はSX501から出土した土器である。遺構の残存状況に比べ、出土遺物はきわめて少ない。出土状態から同じ時期の一括遺物であろう。107はわずかに内傾する受口口縁壺で、紋様は施されていない。108は口縁の形狀は不明であるが、長方形の区画の中に斜格子紋を施す。109は壺の上げ底底部である。白岩期の壺である。110は内傾する受口口縁壺で、口縁下位に刺突と沈線による長方形の区画紋を施す。西遼江地域からの搬入品であろうか。111は横捺波状紋を2段施す。弥生後期の壺に多い紋様編成であるが、胎土・焼成は他の白岩期の土器と同じである。112は小型高杯である。113は縱方向にハケ調整し、外反する口縁で端部に刻み目を施す壺もしくは深鉢である。いずれも白岩期の土器である。

6区の出土遺物

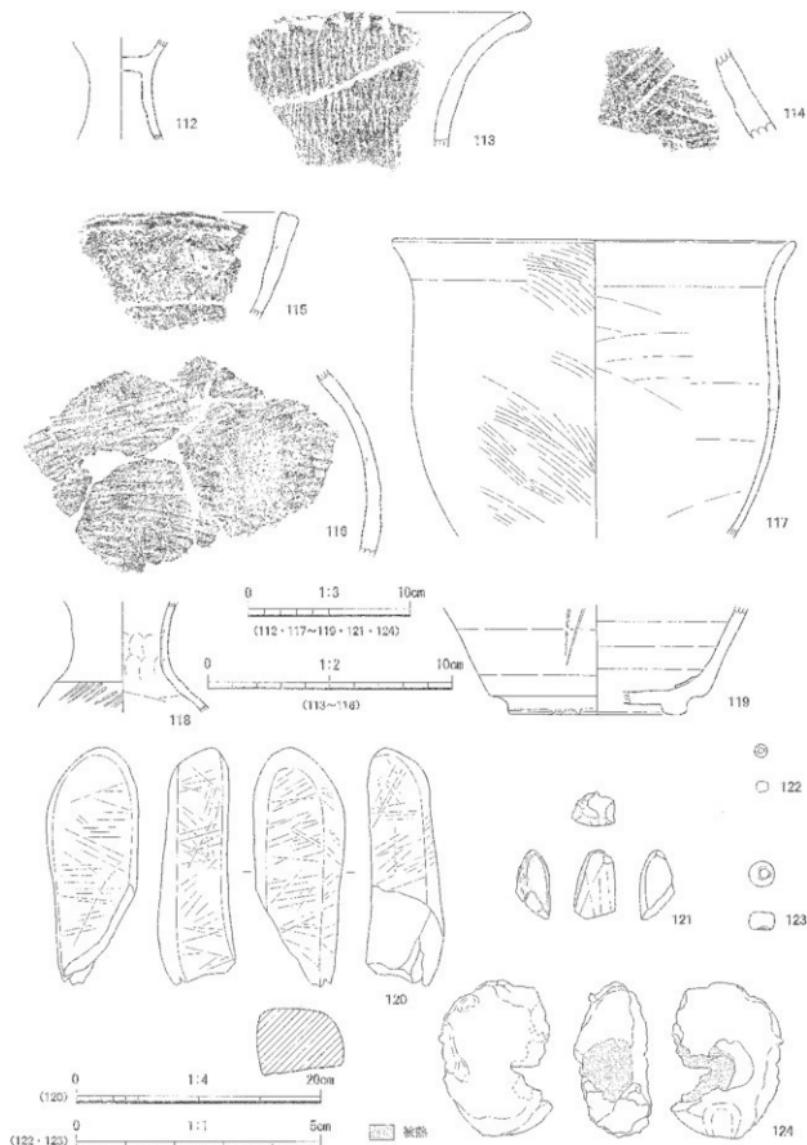
114～119は6区から出土した土器である。114は脚部をヘラによる沈線で格子目に交差させた紋様で、丸子式の壺である。

第23圖 出土遺物與測量圖[6]





第24圖 出土遺物実測図(7)



第25圖 出土遺物実測図(2)

115はSK609から出土した。115の壺片は口縁部片として図化したが、胴部の接合の際、剥離した痕跡で、いわゆる偽口縁の可能性もある。116は条痕紋調整を施した壺胴部片である。時期は中期中葉の峯田期であろうか。118は後期後葉の堀川期新段階である。いずれも出土状態から同じ時期の産業遺物であろう。119は灰釉のかけられた漁戸・美濃戸の鉢である。これのみが時代の異なる遺物である。

石製品・土製品・玉類

120は砂岩製の砥石である。軟質で小笠謹層によくみられる岩質で、身近な石を砥石として使用した例である。121はカンラン岩製の小型磨製石斧で、破損し廻収されたのであろうか。122・123は濃青色のガラス小玉である。1区のピットや搅乱層からの出土であるが、形状や他の時期の遺物が認められないことから、弥生時代の小玉と判断される。124は3区SD301抜張2から出土した遺物であるが、焼土ブロックで、中空の穴の部分が鍊く熱を受けている。羽口にも類似しているが、用途不明製品である。遺構の時期は弥生後期の堀川期である。今後、なんであるかが課題となろう。

第5章　まとめ

第1節　遺構と遺物の検討

本所の実施した発掘調査の結果は以上の通りである。袋井市教育委員会の発掘調査が今回の調査区の南側にあたる中央公民館や保健センターの敷地とその周辺であった。この袋井市の調査結果と比較すると、その連携と遺物に以下のような異同がみられた（松井一明 1983 1988 1990）。

1 袋井市の調査結果によると、鋼文中期の土器とそれ以降の石器が採集されている。弥生時代には中期中葉から後期後葉まで竪穴住居跡、平池式住居跡、掘立柱建物跡、方形周溝窓など、古墳時代には掘立柱建物跡、古代・中世の遺物と掘立柱建物跡が発見されている。

2 本所の調査では弥生時代中期前葉・中葉の土器とピットが僅少しか発見されている。中期後葉には調査区の3・4・5区東側に南北に延びる溝状遺構が発見されているが、その形状から四隅の切れた方形周溝窓ではないかと考えられる。このように考えると、1区から出土したガラス玉は、後世の搅乱によって、元の位置から遮離した副葬品である可能性もあるが、明確ではない。古墳時代以降の遺構・遺物がきわめて少ない点は、袋井市の調査結果と大きく異なる。

3 本所の調査結果では、1区や4区のように多数のピットなど遺構の集中する調査区もある。他の調査区は搅乱部分が多いこともあって、性格不明の土坑や溝・ピットがあつても出土遺物は少なく、生活の痕跡はやや薄い。おおむね遺構の帰属時期は弥生時代後期（おそらく後期後葉であろう）であり、3区で検出された竪穴住居跡など居住遺構は少ない。それに比べ、19年度の袋井市調査では竪穴住居跡の重複が多められ、その区域が繰り返し居住域として使用されたことと異なっている。3区で発見された溝のSD301が集落を巡る区画溝とすれば、生活的中心よりやや離れた区域とも考えられる。

4 今回の調査では袋井市の成果と異なり、古墳時代以降の遺構・遺物が1区を除いてほとんどないことを指摘できる。1区についても中世の遺物がわずかに認められたのみで、全体に今回の調査区は、弥生時代以降近代まで、居住空間から大きくはずれた区域であったと考えられる。

以上が、18年度から継続した発掘調査の成果である。

第2節 研究史の中で

大門遺跡は、東海道新幹線工事に伴って、昭和37（1962）年2月18日から27日の10日間発掘調査された。この時の調査地点は、今回の調査地点の南西に位置し、現在の東海道新幹線の敷地となっている。

当時、静岡県教育委員会では、土木工事により破壊される埋蔵文化財の所在を周知徹底すべく『静岡県遺跡地名表』を刊行した。この遺跡になったのが当時の国鉄によって計画された東海道新幹線工事であった。

予想される新幹線の路線範囲を中心に遺跡分布図を作成し、きわめて重要な松林山古墳については、路線変更を申し入れ、その結果、松林山古墳の大半が保存されることとなった。新幹線工事に伴って清掃する遺跡については、静岡県教育委員会に調査の委託があり、発掘調査と記録作成が計られることになった。静岡県教育委員会にとって、新幹線工事に伴う発掘調査とその調査報告書の刊行は、従前の埋蔵文化財行政の枠を予算規模においてもはるかに越えるものであり、その体制を作ることは、その後の埋蔵文化財行政として始発を示すことであった。

当時、静岡県教育委員会社会教育課には文化財担当として長田実が在籍し、県の京都から西部の研究者を巡回員しその協力を得て、新幹線工事に伴っての発掘調査を実行した。この頃の県内市町村には発掘調査を担当する職員は、静岡市（蟹月薰弘）、磐田市（平野和男）、浜松市（向坂鋼二）を除いておらず、発掘調査の諸届や予算の策定・執行・精算などの事務は県があたり、調査に伴う宿泊の手配等の費用が市町村の協力で行われた。

しかしながらそれ以前の発掘調査は、日本考古学協会の実施した登呂遺跡の調査や浜松市教育委員会の実施した磐塚遺跡の学術調査（团长・後藤守一）と静岡大学文理学部史学研究室（内藤晃・市原壽文）の調査、和島誠一、久永泰男、日本大学郷土歴史の調査、國學院大學（須口清之・下津谷達男）の伊場遺跡・浜北市内の調査、県内高校郷土研究部の発掘調査であり、登呂遺跡と磐塚遺跡を除いてそれほど大規模なものではなかった。昭和36年から1年半をかけて県内各地で行われた新幹線の調査は、規模の点でも関係した研究者の人数においても、初めての大がかりなものであった。

また記録保存を前提に統一した発掘調査報告書を残す、という現在の埋蔵文化財のスタイルが本格的に取られた点も静岡県の埋蔵文化財にとって、きわめて大きな意味を持っていた。発掘調査報告書という点では日本国有鉄道（国鉄）のまとめた調査報告書の大半が静岡県分で占められ、さらにこの部分を増刷し、『静岡県文化財調査報告書 第6集』として刊行した点は、当時とすれば、画期的な意味を持った。

新幹線工事に伴う大門遺跡の発掘調査は、調査担当者は信託にあった大谷統一（純仁）で、調査補助員として当時存在した、静岡大学教育学部浜松分校の学生があつた。大谷は長田の後輩ということもあり、静岡県教育委員会社会教育課の嘱託として、先の『静岡県遺跡地名表』・『静岡県の古代文化』の刊行の裏方として携わっていた。それは、両書の凡例に記され、筆者も関係者と本人から聞いていた。大門遺跡の発掘調査の頃、大谷は20代半ばという年齢であり、まさに新進気鋭として活躍していた。

当時、県西部地方では、久永泰男・内藤晃・長田実という戦後のリーダーのもとで、親家遺跡などの発掘調査において薰陶を受けたものや大谷のように主として樋口や下津谷の指導を受けていた若手研究者が、第2世代として活躍し始めていた。第2世代である平野和男・向坂鋼二・山村宏・大谷純一は30代前半から20代半ばという年齢であり、新幹線工事に伴う様々な発掘調査の現場指揮官として羽ばたいていった。

大門遺跡の調査終了の半月後、平野・山村・大谷を調査担当者として袋井市地蔵ヶ谷古墳群と横穴群の調査が行われ、多人の成果を得た。調査補助員には先の静岡大学浜松分校の卒業生や学生、参加した

高校生は県立掛川西高等学校研究部の生徒などである。梶塙の調査は明治大学考古学研究室や静岡大学史学研究室の学生、地元静岡大学浜松分校の学生と卒業生である教員、高校生の参加をえて大規模な調査団が結成されていたが、大門遺跡や地蔵ヶ谷古墳群の調査は、大谷等の指揮のもとに、地元を中心とした人々で構成されていた。調査の一つ一つが小規模であったことは、彼等が若く影響力が大きくなれない点にあろう。その点では梶塙と異なっている。

新幹線工事に伴う記録保存を前提とした発掘調査は、昭和38（1963）年の遠江考古学研究会の誕生につながっていく。その後、しばらくの間、遠江考古学研究会によって、県西部の考古学が発展したといつても過言ではない。こうした位置づけをもつ1962年の大門遺跡の発掘調査は、その年の10月に行われた谷坂古墳群（担当 大谷純一）における弥生時代包含層の調査とともに、袋井市域では最初の弥生時代遺跡の発掘調査であった。

あとがき

発掘調査及び報告書作成にあたっては、次の方々や機関からの教示と援助を賜った。記して感謝申し上げます（敬称略）。

伊藤通玄 平野吾郎 岩本貴 白沢崇 大谷宏治 田村義太郎 萩池吉修 大橋保夫 塚本和弘
戸塚和美 柴田稔

引用文献

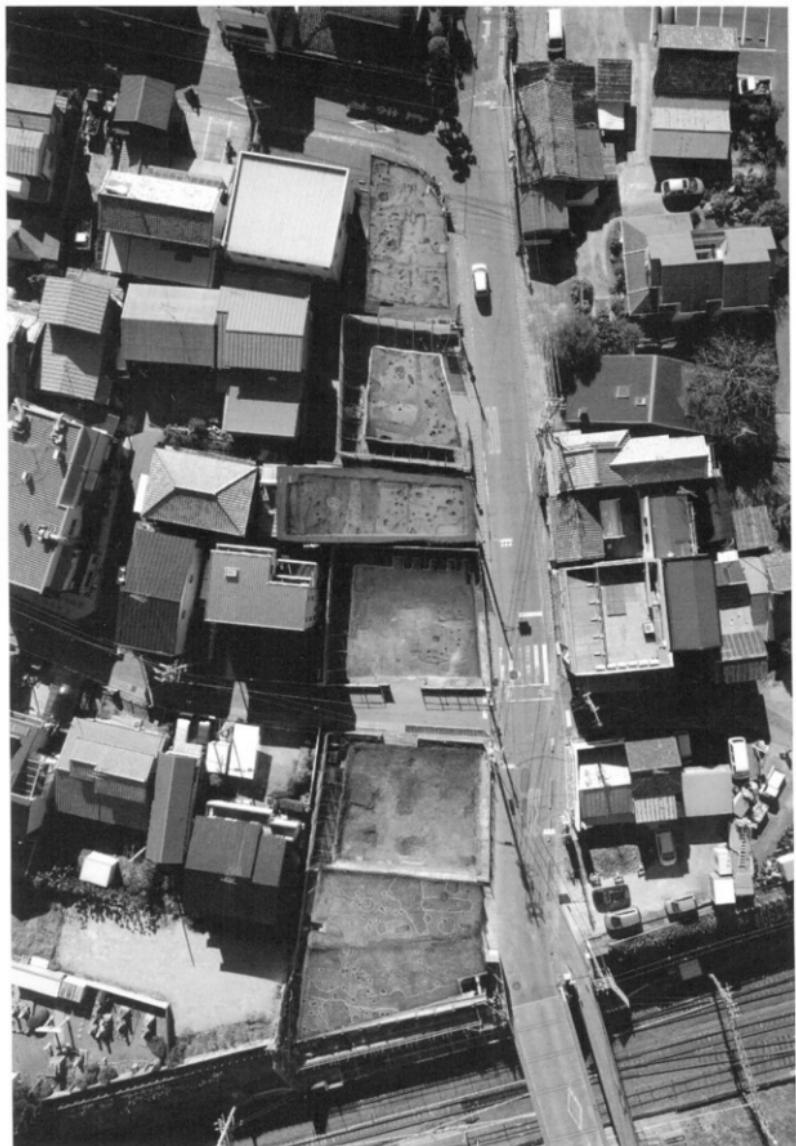
- 大谷純一 1965 「大門遺跡」「谷坂1・2・3号墳」『静岡県文化財調査報告書』
大谷純仁 平野吾郎 1968 「袋井市徳光遺跡発掘調査概報」『東名高速道路（静岡県内工事）関係埋蔵文化財発掘調査報告書』
袋井市 1983 『袋井市史 通史編』（吉岡伸夫 柴田稔執筆）
松井一朗 1983 『大門遺跡 第2次発掘調査報告書』
松井一朗 1988 『大門遺跡 第4次発掘調査報告書』
松井一朗 1990 『大門遺跡 第4次発掘調査報告書』
浅羽町 1997 「弥生時代の遺跡」『浅羽町史 資料編一』（柴田稔執筆）
萩野谷正宏 2000 「白岩式土器」の再検討『伝統7号』
白沢 崇 2007 2008 『鶴田I遺跡』

表2 4・6区造構一覧表

区	造構番号	長さ(長径)	幅(短径)	深さ
4	SD401	3.86	1.32	0.17
4	SD402	3.15	0.72	0.16
4	SD403	2.46	0.65	0.16
4	SD404	5.18	2.05	0.15
4	SK401	0.40	0.25	0.10
4	SK402	0.85	0.70	0.16
4	SK403	0.85	0.65	0.21
4	SK404	0.95	0.65	0.31
4	SP401	0.45	0.30	0.33
4	SP402	0.65	0.45	0.16
4	SP403	0.25	0.18	0.05
4	SP404	0.25	0.23	0.08
4	SP405	0.50	0.46	0.32
4	SP406	0.25	0.23	0.13
4	SP407	0.65	0.60	0.19
4	SP408	(0.40)	0.30	0.10
4	SP409	0.27	0.25	0.22
4	SP410	(0.13)	0.20	0.04
4	SP411	0.25	0.25	0.13
4	SP412	0.90	0.60	0.43
4	SP413	0.60	0.50	0.11
4	SP414	0.55	0.47	0.09
4	SP415	0.45	0.37	0.31
4	SP416	0.45	0.40	0.11
4	SP417	0.45	0.40	0.22
4	SP418	0.25	0.20	0.17
4	SP419	0.25	0.10	0.06
4	SP420	0.50	0.40	0.22
4	SP421	0.45	0.30	0.21
4	SP422	0.40	0.35	0.08
4	SP423	0.30	0.30	0.11
4	SP424	0.35	0.22	0.21
4	SP425	0.45	0.42	0.13
4	SP426	0.25	0.20	0.13
4	SP427	0.25	0.25	0.08
4	SP428	0.30	0.12	0.22
4	SP429	0.33	0.20	0.08
4	SP430	0.50	0.40	0.15
4	SP431	0.45	0.35	0.07
4	SP432	0.45	0.40	0.10
4	SP433	(0.45)	0.40	0.18
4	SP434	(0.55)	0.40	0.22
4	SP435	(0.27)	0.35	0.25
4	SP436	0.50	0.45	0.33
4	SP437	0.30	0.30	0.24
4	SP438	0.35	0.35	0.21
4	SP439	0.35	0.35	0.09
4	SP440	0.40	0.35	0.11
4	SP441	0.72	0.55	0.43
4	SP442	0.25	0.20	0.15
4	SP443	0.30	0.25	0.13
4	SP444	0.55	0.40	0.08
6	SK601	0.76	0.61	0.24
6	SK602	1.08	(0.96)	0.13
6	SK603	0.84	0.56	0.18
6	SK604	1.16	(0.90)	0.23

区	造構番号	長さ(長径)	幅(短径)	深さ
6	SK605	(1.12)	1.14	0.15
6	SK606	1.04	0.66	0.23
6	SK607	1.36	0.66	0.22
6	SK608	1.80	(1.00)	0.48
6	SK609	(1.40)	1.40	0.22
6	SP601	0.24	0.22	0.22
6	SP602	(0.24)	0.18	0.04
6	SP603	(1.00)	0.50	0.23
6	SP604	0.38	0.30	0.10
6	SP605	0.34	0.32	0.26
6	SP606	0.40	0.30	0.09
6	SP607	(0.80)	0.48	0.22
6	SP608	(0.26)	0.18	0.09
6	SP609	(0.52)	0.48	0.18
6	SP610	0.40	(0.22)	0.13
6	SP611	0.18	0.16	0.09
6	SP612	(0.26)	0.30	0.14
6	SP613	0.74	(0.60)	0.13
6	SP614	0.50	0.42	0.15
6	SP615	0.46	0.34	0.11
6	SP616	0.36	0.22	0.17
6	SP617	0.22	0.22	0.09
6	SP618	0.34	0.32	0.12
6	SP619	0.50	0.40	0.21
6	SP620	0.30	0.28	0.25
6	SP621	0.29	0.28	0.15
6	SP622	0.24	0.22	0.11
6	SP623	0.24	0.22	0.15
6	SP624	0.42	0.32	0.17
6	SP625	0.37	0.30	0.19
6	SP626	0.36	0.34	0.13
6	SP627	0.49	(0.18)	0.23
6	SP628	0.30	0.26	0.16
6	SP629	0.24	0.22	0.06
6	SP630	0.44	0.30	0.15
6	SP631	0.44	(0.22)	0.05
6	SP632	0.37	0.36	0.17
6	SP633	0.45	0.38	0.11
6	SP634	0.84	0.50	0.23
6	SP635	0.36	0.22	0.07
6	SP636	(0.42)	0.36	0.24
6	SP637	0.44	0.39	0.25
6	SP638	0.34	(0.26)	0.14
6	SP639	0.60	0.42	0.21
6	SP640	0.34	0.30	0.06
6	SP641	0.52	0.40	0.16
6	SP642	1.17	(0.56)	0.30
6	SP643	0.94	0.46	0.27
6	SP644	0.32	0.30	0.16
6	SP645	0.40	0.35	0.18
6	SP646	0.35	0.30	0.08
6	SP647	0.45	0.25	0.07
6	SP648	0.40	0.34	0.07
6	SP649	0.23	0.26	0.26
6	SP650	0.30	0.30	0.20

図版 1



1 調査区全体写真（空中写真の合成）

図版2



1 大門遺跡全景（北より）



2 1区北半全景（上より）



3 1区南半全景（上より）

図版3



1 SB1083 (西より)



2 SX1114 (北より)



3 SX1117 (東より)

図版4



1 2区全景（南より）



2 SX201（北より）

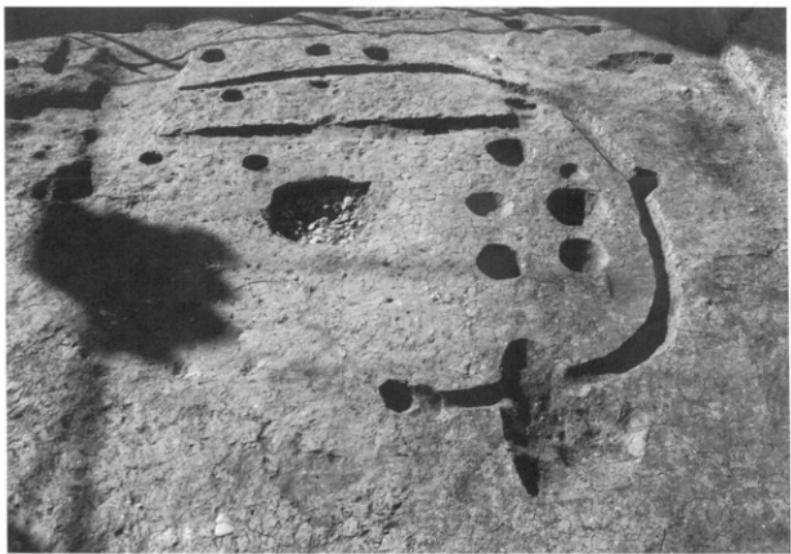


3 SP201（南より）

図版5



1 3区全景（北より）



2 SH301（東より）

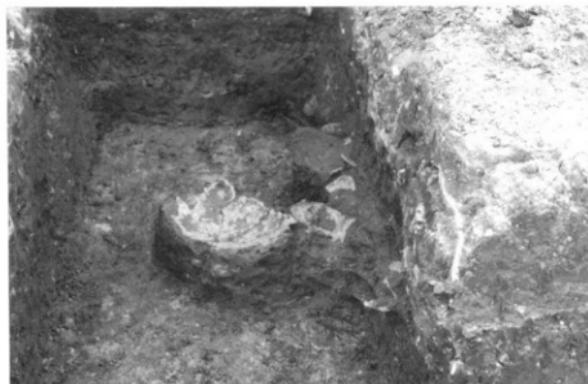
図版6



1 SX301 (北より)

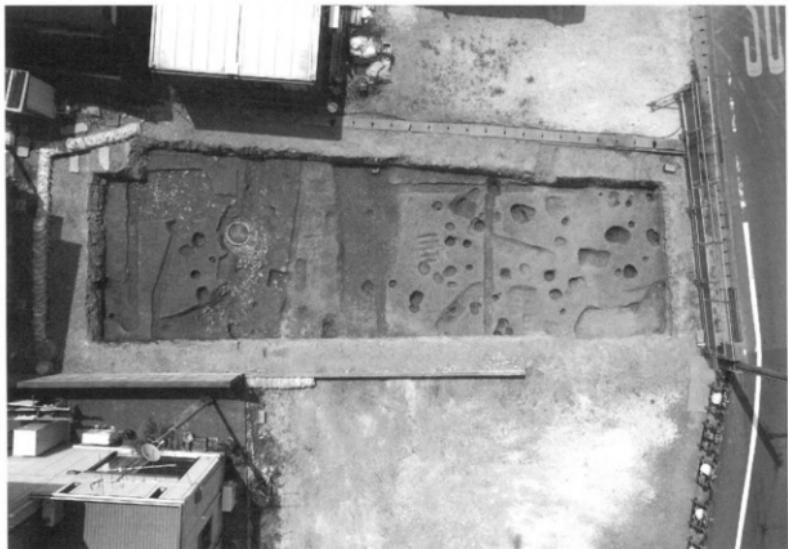


2 SD301 拡張1(北より)



3 SD301 拡張3(北より)

図版7



1 4区全景（北より）



2 4区完掘全景（南より）

図版8



1 4区透構検出前（南より）



2 4区完掘全景（南より）



3 SD404（北より）



4 SD404（南より）

図版9



1 4区ピット群（東より）



2 SK404（南より）



3 SK404（西より）



4 SP434（南より）

図版10



1 5区全景（上より）



2 SD501・502（西より）



3 SX501（南より）



4 SX501土器出土状況（西より）

図版11



1 SX501・SD501（西より）



2 SK501（南より）

図版12



1 6区全景（北より）



2 6区完掘（北より）

図版13



1 6区南東（北より）



2 SP641（東より）



3 6区焼土（西より）



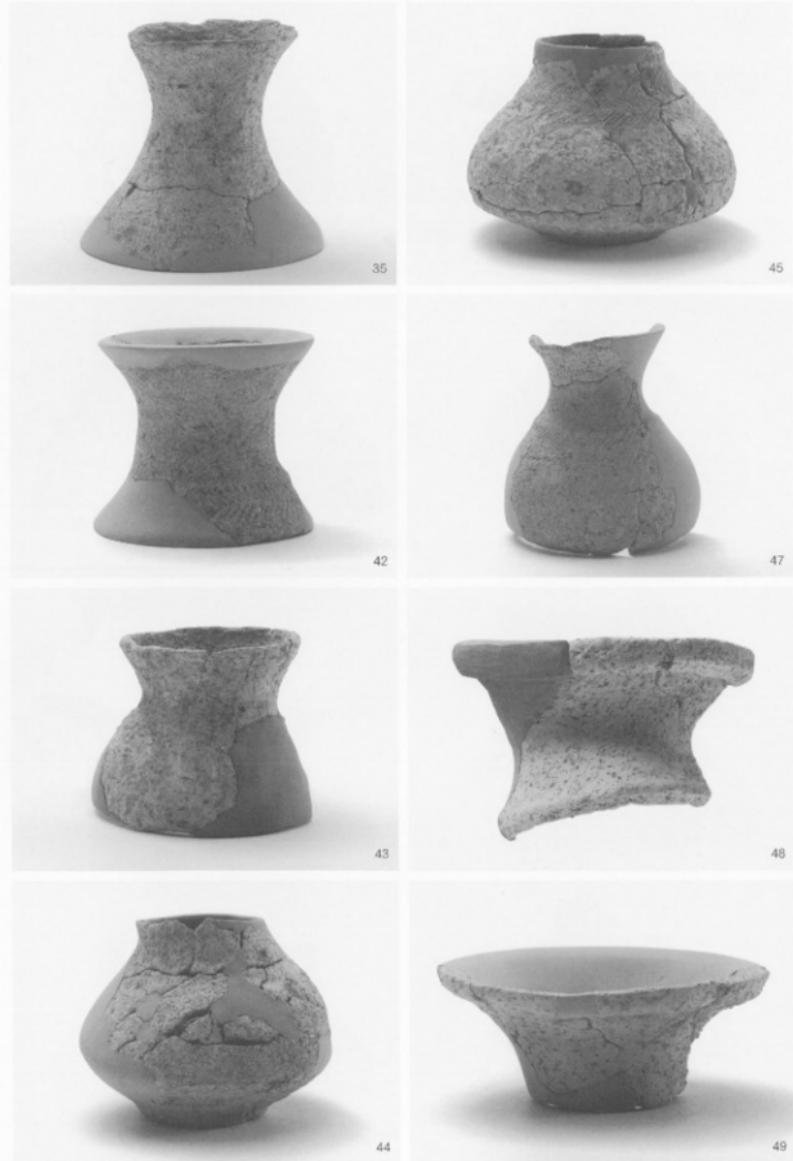
4 SP602（西より）

図版14



出土遺物1 土器

図版15



出土遺物2 土器

図版16



出土遺物3 土器



81



107



94



108



106



120



123

122

123・122



121



124

出土遺物4 石器ほか

報 告 書 抄 錄

ふりがな	だいもんいせき
審 名	大門達謙
副 書 名	平成18~21年度(認)田舎路之上絵敷急地方道路整備事業(新路B)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻 次	
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告書
シリーズ番号	第221集
編 著 者 名	足立駿司
認 索 機 關	財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
所 在 地	〒422-8002 静岡県静岡市駿河区谷田23番20号 TEL 054-262-4261(代表)
発 行 年 月 日	2010年3月25日

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第221集

大門遺跡

平成15~21年度(都)田端景之上根聚落地方道路整備事業(街路B)に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成22年3月25日 発行

編集・発行 財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
〒422-8002 静岡県静岡市駿河区谷田23-20
TEL (054)262-4261㈹
FAX (054)262-4266

印 刷 所 みどり美術印刷株式会社
〒410-0058 静岡県沼津市沼北町2-16-19
TEL (055)921-1839㈹

